
月読の塔の姫君

館野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月読の塔の姫君

【Zコード】

Z0632BA

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

『イルーシャはわたし、わたしはイルーシャ』

今まで惰性で生きてきた少女、由希。ある日覚めたらなぜか絶世の美女になっていた彼女は、古の王妃として第一の人生を歩むこととなつて。

これは伝説の姫君と呼ばれた少女とその周囲の人々と国の変化の物語。

緑と魔法の国、ガルディア。
かの大國には伝説となつてゐる美しい眠り姫がいる。

それはむかしむかしのおとぎ話。

アークリッド王の妃、イルーシャ姫は月光のような淡い金の髪と、
青い月のような瞳をしたそれは美しい姫君だった。

王とイルーシャ姫はそれは仲睦まじく、お互いを思ひ合つて穏や
かな時を過ごしてゐた。

しかしある時、姫君は横恋慕した悪しき魔法使いに呪いをかけら
れ、長き眠りについてしまう。

どうにかして姫の呪いを解こうとした王だが、その方法を知つて
いるのは呪いをかけた魔法使いだけ。しかし、呪いが成就した魔法
使いはそれに満足したのか、それ以来姿をくらましたまま行方が知
れない。

王は昼夜と眠るイルーシャ姫をかき抱き、絶望に嘆き哀しんだ。

その後、優れた魔法使いでもあつたアークリッド王は月読の塔に
姫の身を移し、かの王以外誰も近寄ることが出来ないよう魔力を
かけた。

王は姫が眠りについてからも以前と変わらず足繁く彼女の元へと
通い、それは王が退位して死につくまで続いたといつ。

ガルディア王国の月読の塔に今も姫は眠る。

吟遊詩人たちは詠う。

姫君は長い年月をかけて再び半身たる王と出会つことを夢見てい
るのだと。

……ん~……朝?

瞼越しに光を感じて、わたしは寝返りを打った。

柔らかく体を支える布団の感触に違和感をふと覚える。

うちのベッドのマットレスはこんなに柔らかくない。堅くて、長時間寝るともれなく腰が痛くなるというありがたくないオプション付きだ。

それがなに、このふつかふか。

「……え?」

そこでやっと家のベッドでないと気がついて、わたしは飛び起きた。

……えーと、リビング?.

ベッドの天井から透けるような薄い布が幾重にも垂れ下がっている。いわゆる天蓋といつやつだらうか。

天蓋付きのベッドなんて初めて見たよ、それだけじゃなくて寝ちゃつたよ、うわあ。それも半端じゃない広さだし。

知らないうちに気を失つてどいの金持ちが家のベッドに寝かせてくれたとか?……いやいや、そういう場合、普通救急車呼ぶよね、などと、我ながら寝ぼけたことを考えながらベッドの端まで移動しようとした時。

「……なにこの格好……」

自分が中世ヨーロッパに出てくる人物のようなドレスを着てこる」と今更ながらに気が付いた。

なんだ、これは。なにかのコスプレかなにか?

ひらひらでふりふりでふわふわの衣装に、なんだか眩がしてき

た。

普段ジーンズが多いわたしにはある意味拷問だ。

それに、なんかさつきから視界に金色の髪がちらちらしてるんだけど、これってウイッグだよね。それも半端なく長い。間違いなく膝裏まであるだろ。なんでわたしはこんなもん被ってるんだ。鬱陶しくてしようがないので、思い切ってそのジラを引っ張つてみた。

「うあ

痛い。

ちょっと涙目になりながら、わたしは地肌から抜けた数本の髪を見つめた。

ひょっとしてこの髪は本物なのでは？ という考えがよぎったが、わたしは頭を振つてそれを否定する。

いやいや、間違いなくわたしは平均的な日本人。わたしの地毛は、染めてない黒髪のはずだ。

なんだか妙なことに巻き込まれているような気がした。とにかく誰かに会つてこの状況を把握しないと。

そう決心してベッドから降りる。

部屋の中はベッドと同じくアンティークな家具が備えつけられていた。

売つたらいつたいいくらになるんだろう、と夢のないことを考える。

いや、そんなことを考えてる場合じゃなかった。まず、この状況を分かる人を捜さなければ。

「あのー、誰かいませんかー？」

ドアから顔を出して大声で叫んでみる。

……けれど、期待した返事はない。

「……仕方ない、探しにいくかなあ」

ドレスの裾を踏まないよう注意しながら螺旋状の階段を降りていぐ。

こんな所で下手に転んだら、絶対大怪我じゃすまない気がする。なんだろうこの建物、ひょっとして塔、なのかな……？ 变に縦に長い気がする。

それに窓がないのに妙に明るい。……なのに照明らしきものが見当たらないとはどうことだ。

不思議に思いながらも、わたしばどここまで続くか分からぬ階段を降り続けた。

「つ、疲れた……」

いつたいどのくらい時間がたつただろう。

なんか変なコスプレしているのもあって、神経使つていやに疲れた気がする。

塔の出口らしいドアを開けると、幸運なことに庭師らしいおじさん（多分）の後ろ姿が見えた。

自分が妙なコスプレをしているのは気になっていたけど、わたしは思い切ってそのおじさんに声をかけてみることにした。

「……あの～、すみません」

「……ひーこつー。」「うわああ！」

まるで幽霊を見たかのような反応をされて、ついつられて叫んでしまった。

その反応はちょっと失礼じゃない？ と思つておじさんを見る。あ、このおじさん、後ろから見たときは気が付かなかつたけど、外人なんだ。

日本語が通じるかは分からぬけど、やつと会えた人だ、とりあえず話しかけてみよう。

「ちょっと聞きたいことがあるんですけど、あの、他に誰かいませんか？」

この言いぐさは自分でもどうかと思つたけど、人の顔を見て腰を抜かしたおじさんではどう考へても話にならないだろ？

おじさんは、ああ、とか、うつ、とか意味不明な呻き声をあげながら震える手である方向を指差した。

あ、日本語が通じる人みたい。良かつた。

内心ホツとしながら、おじさんが示した方向を見ると、一応舗装されてる小道がある。建物らしきものは見えないけど、多分その方向に人がいることは確かなんだろう。

「ありがとうございます。助かりました」

軽く頭を下げて、その場を後にする。

後ろからおじさんが神よ、とかなんとか呟くのが聞こえてきたけど、氣のせいだと思いたい。

まさかホラーなメイクでもされてるんじゃないの？と思つて顔に触つてみる。

……すべすべだ。

化粧してる感じはしないし、すっぴんとしか思えないんだけど、おじさんのあの怯えようはちょっと気になる。

そんなことを考えながら、小道を歩いていたら。

「塔の結界が消えたと思つたら、まさかこんなことが起るとはね」流暢な日本語でそう言つたのは、超が上に付くよつた美形のお兄さん。なぜかこの人もわたしと同じファンタジー映画に出てくるような格好をしている。

長い金髪に緑の瞳。この人も外人さんだ。

なんか外人率高いな！ と言つても出会つたのはお兄さんを入れて二人だけど。

あのー、もしもし？ 今あなた、ビームから出でましたか？

なんだか突然現れたような気がするんですが。

思わずぽかんとしていると、目の前のお兄さんはちょっと田を見開いてから、わたしをまじまじと見つめた。

「伝承通りだ、月光のような髪と青い瞳」

はい？ この人、今青い瞳って言わなかつた？

この鬱陶しいくらい長い髪がウイッグなのは分かるけど、わたしはカラコンまで入れてるのか？ コスプレにしても、なにその徹底ぶり。

わたしにこの格好をさせた人物の執念にちょっと青ざめていると、美形のお兄さんは私の前で片膝をついた。

え、と思つて見ていると、お兄さんはおもむろにわたしの手を取る。

え？ え？ ちょっと、なにする気？

これは、ひょっとして、ひょっとすると。

「まさかあなた様に会える日が来るとは思いもしませんでした。

わたしにとつて、これ以上の幸福はございません」

美形のお兄さんはそう言つてにつゝつと微笑むと、つかつかとわたしの手にキスをした！

うわああああ、まさかと思つたけど、この人本当にやつてくれたよ！

「な

思わず固まるわたし。

生糰の日本人であるわたしに「これは無理。

恥ずかしい。恥ずかしすぎる。

「あああの、あの……」

もの凄くじもつてしまつたが、この場合これくらい動搖しても仕方ないと思つ。

頬が熱い。きっと今わたしは真っ赤になつてゐるだろ。

わたしの手を離して立ち上がつたお兄さんは不思議そうに首を傾げた。

「なにか変だな。君はイルーシャ姫だよね？」

「イルーシャ姫？ 誰だ、それは。

「人違いですっ」

ぶんぶんと首を横に振つて否定したわたしに、お兄さんの質問が続く。

「でも、君、塔から出でてきたよね。だとしたら、姫としか考えられないんだけど」

「確かに塔から出でましたけど、わたしは姫とかじゃないです。わたしの名前は原田由希。日本人でただ的一般庶民です！」

「ハラーダ・ヨーキ？ ニッポン？」

ちょっと、なんでいきなりカタコトになるんですか、お兄さん。

それにハラーダ・ヨーキって呼び方、なんか間抜けでやだ。

「いえ、ヨーキじやなくて、ユキ、由希です！」

「ヨーキ」

それからお兄さんとの攻防は少しばかり続いたけれど、結局わたしが折れる形で収束した。

「……もう、ヨーキでいいです……」

肩を落とすわたしに、お兄さんは苦笑して「ごめんね」と謝った。

どうやらわたしの名前の発音は外人さんには難しいらしい。

「話を戻すけど、君は姿はイルーシャ姫だけど、中身はヨーキっていう女の子なのか」

「さつきからイルーシャ、イルーシャって、誰ですか、それ」

「伝説の姫君。月読つきよみの塔の眠り姫だよ」

「はあ、でんせつのひめぎみ、ですか」

「なんでそこで棒読みになるのかな？ 信じてないみたいだけど、僕は嘘はついてないからね」

お兄さんは苦笑するけど、こんな荒唐無稽な話、信じじろといふ方

が無茶だ。

「……ああ、そうか。君はまだその姿を見ていないんだね？ なら、信じられないのも無理ないか」

お兄さんは頷きながらなにかを呟いた。

「そこ、一人で納得しないでください。そいつ言はずとした途端、周囲の風景が一変した。

「え……ええええっ！？」

さつきまで外にいたはず。なのに今いるのは豪華な内装の室内。「なんだか随分驚いてるようだけど、ひょっとして移動魔法を知らなかつたりする？」

「……移動は分かるけど、魔法ってなに。それって、ファンタジー小説とかでよく出てくるあの魔法？」

なんかいろいろと妙な展開ばかりで頭が痛くなってきた。

「魔法という言葉は聞いたことはありますけど、実際に見たのは初めてです」

「みかみを押さえながら言ひついで、壁田したお兄さんに初めて？」と聞き返された。

なに、それ驚くようなこと？

とりあえず頷き返すと、お兄さんはふつんと呟いてなにかを考えている素振りをした。

「君がいたニッポンって国には、魔法の概念はあるのに実行はされてなかつたのか。実に興味深いけど、今はそれを聞いてる場合じやなかつたね。……君も訳の分からぬ状況で大変だろ？けど、まだしなければならないことが残つてるよ」

「そうだった、このコスプレがどうなつてているのか確認しなきゃいけないんだった。

お兄さんに促されて、華奢なデザイントーングのいかにも高価そうな鏡の前に立つ。

田に入ってきたのは、儂げなお姫様。

緩やかに波打つ淡い金の髪と、淡い青の瞳。年齢的には少女と女性の間といったところじゃないだろうか。

小さな顔に、それぞれのパーツが絶妙に配置されている、絶世の美貌。

傾国の美姫っていうのはこういう人のことを言つたのね。……って、見とれている場合じやなかつた。

これ、もしかしてわたし？　いやいや、まさか、わたしがこんな美女のわけないじゃない。顔の作りからして全然違うし。

無理矢理笑つてみる。お姫様がどこかぎりりない笑みを見せる。思い切り顔をしかめてみる。お姫様が難しい顔になる。右手を挙げてみる。お姫様もそれに合わせて手を挙げる。鏡の前でターンしてみる。お姫様もターンする。

なんだこれは。なんだこれは。なんだこれは。
これはもしかして、……わたし？

「なにこれええええーっ！」

自分に起こった事態を理解した瞬間、わたしは喉も裂けんばかりに絶叫した。

「ちょっと、笑いすぎ。失礼です！」

腹を抱えて爆笑するお兄さんに、わたしは涙目になつて抗議する。確かにさつきのわたしは端から見たら変な人だったかもしけないけれど。

「ごめん、ごめん。まさか叫び出すとは思わなくて。でも、これで状況は理解できたみたいだね」

憮然としているわたしに、笑いをこらえているお兄さん。頼みますから、わたしのさつきの奇行は忘れてください。

「姫が目覚めたとなつたら、王に知らせないとならないんだけど。僕は目通りの許可を貰つてくるから、君のことは侍女達に任せること、いいかな？」

ちょっと待つて、『おう』つて、王様！？

「わたし、王様に会わないといけないんですか？ それにここはどこなんですか？ わたし、これからいつたいどうなるんですか！？」

わたしは浮かんでくる疑問を矢継ぎ早に出了した。

だつて、いきなりこんな美女になつて、王に会わせるだなんて言われたら訳分からぬよー！

「ここにはガルディア王国。君から見ればたぶん異世界だよ。ここには二ヶポンなんて国は存在しないしね」

「異世界……？」

あまりのことに呆然とお兄さんを見る。その顔は真面目田そのものだ。

確かに魔法なんもあるし、日常では考えられないことだけだ。

「信じられないかもしないけど、夢でもなんでもなくて、これは現実だよ。……君には気の毒だと思つけど」

「嘘……」

嘘だよ、日本が存在しないなんて。じゃあ、わたしはビビに帰ればいいの？

混乱のあまり涙が浮かんでくる。

「……ああ、泣かないで。酷かもしれないけれど、絶対に悪くようにはしないから」「

お兄さんが指を延ばしてわたしの涙を拭いてくれる。

「そのためにも王に会うことは重要なんだ。……君がその姿でいることも関係あるしね。いきなり王と対面なんて不安かもしれないけれど、僕も同席するから我慢してね。それから王の名はカディスっていうんだけど、彼は僕と歳も近いし、そんなに緊張する人物でもないから大丈夫だよ」

安心させるようにそっと頭を撫でてくれるお兄さんに頷くと、ほつとしたように彼は微笑んだ。

わたしから離れて、じゃあまたね、と言つてその場を去りつじたお兄さんにわたしは慌てた。

わたし、お兄さんの名前聞いてない！

「あのっ、お名前伺つてもいいですか？」

今気づいたとばかりに、ああ、とお兄さんは立ち止まる。

「これは失礼しました。わたしはキース・ルグラン・レグ・アレギリア。ガルディア王国の魔術師師団長を務めています。以後よろしくお願ひいたします」

胸の前で右腕を掲げ、丁重にお兄さん、じゃなくてキースさんは言った。

美形はなにをやっても絵になるなあなんて頭の隅で考えながら、わたしも慌てて言つ。

「あ、はい。こちらこそ、よろしくお願いします」

キースさんはその言葉に微笑んで頷くと、それじゃあね、と部屋を出でいった。

それから程なくしてドアを叩く音がしたので、はいと返事をした
ら、キースさんが言った侍女と思わしき人が入室してきた。

だいたい四十歳くらいだろうか。栗色の髪をひとつめた青い瞳の人は、とても品の良い感じがした。

「失礼いたします。わたくしは侍女長を務めています、リイナと申します。僭越ながらわたくしがイルーシャ様のお世話をさせて頂きます。伝説の姫君にお仕えできるなんて、わたくしは果報者ですわ」

……侍女長といったら結構偉い人なんじゃないだろうか。そんな人に頭を下げられて、ここまでへりくだられると、逆にこっちが恐縮してしまう。

「こちらこそよろしくお願ひします。且覚めたばかりで、事情がよく分からぬのですが、よろしくご指導をお願いします」

「まあ、わたくしのよつな者にそんなお言葉をかけて頂けるなんて。イルーシャ様はなんて素晴らしい方なのでしょう。わたくし、誠心誠意あなた様にお仕えさせて頂きますわ」

ペコリと頭を下げたわたしに、心底感激したようにリイナさんは言った。

いや、中身は一般庶民なので、リイナさんの方が偉いんですけど、この場合、言わない方がいいんだろうな。

「それでは支度の準備をさせて頂きりますね」

リイナさんが手を叩くと、さらに一人の侍女が現れた。

だいたいわたしと同じくらいの歳だろうか。二人はそれぞれシェ

リーとユーニスと名乗った。

「まずは、ご入浴して頂くことになります」

「ご入浴……お風呂！？」

リイナさんに手を取られてだだっ広いお風呂場に連れて行かれた。いや、お風呂場というより、立派な浴場と言った方が正しいかも知れない。

その豪華さに見とれないと、ユーニスさんとショリーさんがわ

たしの着ていたドレスを脱がしにかかりた。

ひいい、なにするの！？」

思わず一人の手を払いのけようとして、わたしははた、と我に返つた。

リイナさん達にとつては、あくまでもわたしはイルーシャ姫なんだ。姫はこんなところで暴れたりしないよね。

耐えろ、わたし。温泉施設だと思えば恥ずかしくない……かもしない。ただし、わたし以外の侍女さん達は服着てるけど。

同性とはいえ、他人に衣装を剥かれる羞恥と戦つてると、リイナさん達に感嘆したような溜息をつかれた。

「まあ、なんて魅力的なお体なんでしょう。輝くような白いお肌といい、どんな殿方もイルーシャ様の前ではいちじろですわ」

うつとうつとう言つたのは赤みがかつた金髪に榛色の瞳のゴーリスさん。リイナさんとショリーさんも同意するように頷いている。

「や、そう……」

見下ろしてみると、確かに出るところは出て、引っ込むべきところは引つ込んでいる体つきをしている。

こんなところまで完璧なのか。イルーシャ姫、恐るべし。

その後のことはあまり思い出したくない。

とりあえず、リイナさん達に体の隅々まで洗われてしまつたことだけは言つておく。

でもまあ、侍女さん達に洗つてもらつて正解だつたと思ったのは、髪。

あまりにも長すぎるので、一人じゃ洗うのはきっと大変だつたらう。

いつそ切つた方がと提案したら、侍女さん達に揃つて「こんな見事な御髪をとんでもない！」と反対された。

いやー、でも毎回侍女さん達に洗つて貰うのもなあ。それにやつぱりお風呂は一人でゆっくり入りたいのよ。

でも無理なんだろな、と今日一日いろいろと諦めながら、お風呂からあがつたわたしは、リイナさん達に手際よく着付けをされた。

「まあ、瞳と同じ色のドレスがよくお似合いですね」

淡い青色のドレスを身につけ、小さな白い花を髪に編み込んだ姿は、清楚で可憐と言うのにふさわしく、確かに似合っている。

それからリイナさんが、支度ができたことをキースさんに連絡しに行って、ようやく王様とい対面、という段になつた。

わたしを見たキースさんは瞳を見開いてから、少し眩しそうに目を細めた。

「とても綺麗だ」

「ありがとうございます」

うん、イルーシャ姫がね。

わたしは人に褒められるのがとても苦手なんだけど、本来と外見が違すぎるせいか、どうも他人事のようにしか感じられないんだよね。だから、こんなふうにさらつと流せてしまう。

「本来なら謁見の間で行つのが正式なんだけど、執務室になつてしまつてごめんね？」

「いえ、その方がこっちも助かりますから」

キースさんはいかにもすまなそうに言つたが、そんなに仰々しくやられてはこっちが困る。わたしはあくまでも一般庶民なのだ。

キースさんが王の執務室のドアを叩くと「入れ」という返事が返ってきた。

わたしはキースさんに促されて入室する。

書類が積まれた立派な机の椅子に座っていたのは、肩を覆うぐら

いの漆黒の髪と、藍色の瞳の男性だった。

キースさんが中性的な美形とすれば、王様はいかにも男性的な感じの美形。

この人が王様。

どうしよう、なにか挨拶したほうがいいのかな。

「あの……」

なんとか絞りだそうとした声を王様が遮った。

「なぜ、よつと見て俺の代になつて田覚めるんだ、おまえは」
言外になんてことをしてくれたんだとこつ言葉を含みながら、王様は心底嫌そうな顔をした。

「いきなりそういうこと言ひのば、どうかと思ひよ」
不機嫌を露わにする王様に、すかさずキースさんがフォローを入れる。が、既にわたしの中で王様の印象は最悪に近い。
「どう言ひ繕おうが、俺にとつて迷惑な存在であることに変わりはない」

「あの、わたしはそんなに迷惑な存在なんですか？」

つい、間の抜けた質問をしてしまつわたし。でもあの侍女さん達は少なくともわたしに好意的だった。

「ああ、迷惑だな。分かつたら、ひとつと塔に戻つて眠りにつけ。そして一度と田覚めるな」

その一方的な言い方に思わずムカつときた。

「いくらなんでも、そこまであなたに言われる筋合にはないです」
「俺にはそう言える権限がある。王だからな」

「へえ、そなんですか。だとしたらとんでもない暴君ですね。こんな王様を上に戴いてる国民がかわいそひ」

「なんだと、もう一度言つてみろ」

「何度だつて言つわよー。暴君ー。暴君ー。暴君ー。暴君ー。」

もう敬語とかどうでも良くなつてきた。もつこつこつに丁寧な言葉を使うのも嫌だ。

「きさま……」

「だいたいなに、田覚めたら見た」ともない場所で、伝説の姫君とか言われて、あげくの果てには一度と田覚めるな？ ふざけんじやないわよ

やばい、感情が高ぶつすぎて止められなくなつてきた。不覚にも涙が浮かんでくる。

「わたしだつてね、好きでこんなところにいるんじゃないのよー。元の体に戻れるなら喜んで戻つてやるわー。分かつたか、この馬鹿王っ……」

一瞬の沈黙の後。

ぜいぜいと肩で息をするわたし。爆笑するキースさん。啞然とする王様。

涙目でキッと睨むと、王様はなぜか後ろに少し仰け反った。

その顔は反則だよね、とキースさんが呟くのが聞こえたけど、憤つているわたしはそれどころじゃない。

「キース、この女を追放しろ」

「お言葉だけどね、カディス。この国にとつて貴重な観光資源をみすみす追放させる訳にはいかないね」

観光資源で……珍獣扱いか！

気がつかなかつたけど、キースさんって結構いい性格してる。

「伝説の姫君が目覚めたことで、この国にもたらされる経済効果は計り知れない。それを他国に持つて行かれるかも知れないと、それでもいいのかい？」

「それは……」

たたみかけるように言つキースさんに、王様の言葉が詰まる。

「じゃあ、わたしはこの国にとつて大切な客人なわけね？ じゃあ、せいせい丁重に扱つてもらわなくちゃね。よろしくね、カディス！」

今までの鬱憤を晴らすべく、嫌味たつぱりに王様を呼び捨てにしてやつた。

「君もいい性格してるよなあ

感心したようにキースさんが笑う。

「カディスを呼び捨てにするなら、僕もキースと呼んでもらおうかな。丁寧な言葉もいらないから」「え……と、キース？」

「うん、そう。カデイスばかり親しげに名を呼ばれたら、ちょっと
癪だしね」

「誰が親しげだ！」

これに関してはカデイスの言葉に賛成だ。

どうやつたらこれが親しげに見えるのキース。こいつはわたしの
敵だよ。

呆れていたその時、扉がノックされる音が響き、キースがその応
対に出た。

その間、わたしは天敵を睨みつけている。

「……可愛くない女だな」

「別にカデイスなんかに可愛いなんて思われたくないし！」

カデイスとわたしが見えない火花を散らしていると、不意に呵呵
とした笑い声が響いた。

声がした方を見ると、七十歳くらいの白髪のおじいさんが楽しそうに笑っていた。

その後ろには「十代後半くらいの薄茶色の髪をした男の人」が頭が痛いともいうように額を押さえている。

「伝説の姫君は随分と個性的な方のようじゃの」

「……個性的にも程があると思うが。いくら古の王の妃でも現王を馬鹿王呼ばわりとは」

不機嫌を隠そうともせずにカーティスが言つ。
ちょっと待つて、今変なこと言つてたような気がする。

「古の王の妃ってなに?」

首を傾げながらそう言つと、キース以外の人に凝視された。
え……なに、わたしなにか変なこと言つた?

「五百年前の王、アークリッド王の妃つて事だよ」

誰も言葉を発しないのでキースが説明してくれたけど、初めて聞く名前だ。

「アークリッド王? 誰それ」

「呆れた女だな、おまえは。アークリッド王の人生を狂わせておきながら、その王のことも忘れたのか」

「なに、ひょっとしてイルーシャ姫つて物凄い悪女だつたりするの?」

そのわりにはリイナさん達の態度は随分と友好的だつた気がするんだけど。

「おまえ、何を言つてるんだ。まるで他人事のようだ……」

「仕方ないとと思うよ。実際、他人事だからね」

眉を顰めるカーティスに、キースが肩をすくめて言つた。

「おまえまでなにを言つてるんだ、キース」

「信じられないかもしねだけど、この娘、姿はイルーシャ姫だけ

ど中身はユーキつて女の子なんだ」

「……失礼ですが、キース様。そんなことが起こりうるのでしょうか」

今まで黙つてた薄茶色の髪の男の人人が堅い調子で言つた。

「禁呪の魂換えなら考えられるけど、ただ、この娘異世界人なんだよね。その点で人物の特定が必要な魂換えが可能とは思えない」

「……異世界人だと？ なにを馬鹿なことを」

「ユーキ」

よく分からぬ話をぼうつとして聞いていたわたしは、いきなり名前を呼ばれて慌てた。

「な、なに？」

「君がどこに住んでたのか話して『こらん』

「わたしは」

注目されてちょっと緊張しながら言いかけた時、ドアがノックされた。入ってきたのはリイナさん。

「失礼いたします。皆様、陽の間にお集まりになられました。お食事の準備も出来ておりますが、いかがなされますか？」

「そうだね、主要な人物には事情を説明しておいたほうがいいかもね。紹介もしたいし、すぐ移動するよ。リイナも一緒に来て」「かしこまりました」

キースの移動魔法でその場にいた全員が別の場所に移動した。この魔法は一回目だけど、こんな大人数でも移動できるんだ。すこいな。

素直に感心して室内に目をやると、そこには騎士みたいな格好をした三人の男の人がいた。その内の一人はとんでもない美貌の持ち主だ。

この人達もキースが言つていた主要な人物なのかな。

「とりあえず席に着こうか。ああ、ユーキはここに座つて」
キースに椅子を引かれて、わたしは長テーブルの端に着席する。
わたしの目の前にはカティス、左隣にはキースが座つた。

カティスの横には白髪のおじいさん、薄茶色の髪の人、二十代半ばくらいの赤っぽい黒髪の人が着席。

反対側のキースの横には、焦げ茶の髪の四十歳くらいの人、二十代前半と思われる蜂蜜色の髪の人が着席した。

「では自己紹介といきますかな。わしはこの国の宰相を務めているアリストと申します」

白髪で青い瞳のおじいさんが人の良さそうな笑顔を浮かべて言う。「わたしは宰相補佐のイザトと申します。以後よろしくお願ひいたします」

アリストさんの隣に座っている薄茶色の髪に水色の瞳をした男の人が堅い調子で言う。なんというか顔は彫像のように整っているんだけど気難しそうな人だ。わたしはその言葉に慌てて頷く。

カティス、わたし、宰相、キース、宰相補佐……この席順つてもしかしながら偉い順だつたりする？

「わたしは近衛騎士団団長のダリルと申します。イルーシャ様、よろしくお願ひ申しあげます」

キースの隣の焦げ茶の髪に黒い瞳のその人はとつても渋かった。端正な顔といい、若い頃は相当もてたんじゃなかろうか。

「彼はそこにいるリイナの夫だよ」

キースにそう言われて、わたしは後ろに控えているリイナさんを振り返ると、リイナさんは肯定するように頷いた。

うわー、こんなかっこいい旦那さん、いいなあ。でもリイナさんも美人だし、とってもお似合いだ。

「わたしは紅薔薇騎士団団長、ブラッドレイと申します。伝説の姫君にお目にかかる幸せにござります」

赤みがかつた黒髪に赤い瞳の瞳のその人は、どこか気障っぽくそう言った。

この人も美形で、いかにももてそつた空氣を放つていて。あ、こういうのをフェロモンというのか。

「わたしは白百合騎士団団長ヒューイと申します。よろしくお願ひ

申し上げます

蜂蜜色の髪と紫の瞳をしたその人は、わたしの予想に反して、とつてもハスキーな声だった。

ものすごい美人。いや、男の人だって分かつてるけど、とにかく美人。

キースが中性的な美形だとしたら、この人はより女性的な感じのする美形だ。

わたしがぽかんとしてその人を見つめていると、キースがくすくすと笑って言つた。

「美人だろ、彼。十代の頃なんて絶世の美少女と呼ばれていたんだよ」

「……へえ、そうなんだ」

「……キース様！」

頬を染めて抗議する姿はどこか可愛くて、美少女と呼ばれていたのも大いに納得した。

それにしてもこのメンバー、やたら美形揃いだなあ。アリストさんの若い頃はどうだつたのかは本人に聞いてみないと不明だけど。

「あ、わたしは由希、原田由希です。日本から来ました」

わたしがそう言つと、事情を知らない三人の騎士さん達が不思議そうな顔をした。

「……失礼ですが、あなたはイルーシャ様では？」

ダリルさんが至極もつともな質問をしてくる。

「ええと、体はイルーシャなんですが、中身は原田由希なんです」「は？」

三人にそう返されて、わたしはどう説明しようかと思案する。

こんな話、当の本人であるわたしでさえ信じられないのに、他人が訳分からぬのは当然だ。

「見ろ、キース。こんな荒唐無稽な話、誰も信じないぞ。おまけにこの女が異世界人だと？ おまえ、この女におかしなことでも吹き込まれたんじゃないのか？」

「ちょっと、失礼なこと言わないでよね。それじゃ、まるでわたし
がだましてるみたいじゃない」

「実際そりゃ」

「カディス、ちょっと黙つてくれないかな」
キースが王であるカディスの言葉を遮つてそりゃしたのには、わ
たしもびっくりした。

「これは俗に言う暗黒微笑というやつでは?
どこか黒いオーラを放ちながらキースが微笑む姿は恐怖以外のな
にものでもない。

「ヨーキのいたニッポンという国はどんな国なんだい?」
キースに聞かれて、わたしは慌てて少ない知識を総動員する。
「ええと、日本は四方を海に囲まれた島国だよ。工業が盛んかな。
一応経済大国つて言われる」

「……島国で経済大国。聞いたことないですね」

イザトさんがこめかみに指を当てて考える仕草をする。
「あ、じゃあ、アメリカは? ロシア、イギリス、フランス、イタ
リア、ドイツ、オーストラリア」

とりあえず思いついた国の名前を列挙してみる。

「どれも知らん。キース知っているか」

「どの国もこの世界には存在しないよ。だから言つただろ?、ヨー
キは異世界人だつて」

「しかし、それもその女の作り話だと言えなくもないぞ」

「彼女はイルーシャ姫やこの世界のことについて知らなさすぎる。
実際に鏡で自分の姿を見て驚いてた彼女をしてれば、カディス
も納得すると思うよ」

「うああ、お願ひだからキース、あの時のことは忘れて!」

思わず赤面して頬を押さえるわたしをカディスはまじまじと見つ
めると、やがて溜息をついて言つた。

「……おまえがそこまで言うのなら仕方ない。一応信じてやる」
「分かつてくれたようで嬉しいよ。……じゃあ、食事にしようが」

キースのその言葉を合図に、テーブルに料理が運ばれてくる。

焼きたてのパン、豆のスープ、魚介類を炊き込んだピラフのようなもの。薄くスライスしたジャガイモと挽肉と炒めたタマネギを重ねてパイ生地で包んだ料理。手羽を二ン二クで風味付けしてローストしたもの、白身魚のソテー、茹でた野菜などが大皿に盛られていた。

こここの食事は大皿に盛った料理を各自で取る形式らしいで、食事のマナーもそう煩くなさうなので私はほつとします。

「ユーキ、取つてあげるよ」

キースがわたしの分の料理を全部取ってくれた。

「え、ちょっとキース、わたしそんなに食べられないよ」

「どれが君の口に合うか分からぬからね。無理して食べる」ともないし、残していいから」

……キースのこいつは、いいところの出なんだなあと思つ。庶民のわたしには料理を残すのがちょっと心苦しいんだけどな。そう思いながら、淡い緑色をした豆のスープをスプーンですくつて口に運ぶ。

「あ、おいしい」

裏返して口当たりを良くしたスープは豆の風味と塩加減が絶妙で、思わず口元が綻ぶ。

「パンにスープやソースをつけて食べていいんだよ」

「あ、なんだ」

早速言われたとおりに焼きたてのパンをちぎつてスープにつけて食べてみた。うん、おいしい。

「こにもお米つてあるんだね。日本のお米と違つて細長いけど」ピラフもじきをすくつて食べてみる。うわ、味もピラフそのものだ。ちよつと嬉しい。

「米がおまえの国にもあるのか」

「うん、一応主食だよ。パンや麺類を食べることも多いけどね。それにしても、こここの料理がわたしのところと似通つてて良かった」

「ほお、異世界でも似たような料理があるとは、不思議なことがあるものじゃ」

アリストさんが感慨深げにそう言ったのを聞いて、わたしはふいに疑問を持った。

「ね、こじが異世界なら、なんで言葉が通じてるんだろう？ わたしの世界では、日本以外の国に行くと言葉が通じないんだけど」

まあ、英語みたいな公用語はあるけどね。

「それは、君がイルーシャ姫の体に入っていることが要因なんじゃないかな。君はこじの言葉を普通に話してるよ」

「え、そうなの？」

「うん、たまに分からぬ單語が混じるくらいだね」

今まで日本語しゃべつてるとばかり思つてたから、これには驚いた。

「……なんだ。あ、でも、話すのはともかく書く方はどうかな？ わすがにこれは自信ないけど」

「おまえには専任の教師をつけてやるから安心しな。たっぷり絞らせてやるから覚悟しておけ」

「ええ～……」

カティスの容赦ない言葉に、思わず情けない声が出た。そのくらいわたしは勉強というものが苦手なのだつた。

キースが噴き出したのを機に、その場は穏やかな笑いに包まれた。

「勉強は仕方ないからやるけど、できれば元の世界に早く帰りたいんだよね……」

溜息をつきながら白身魚のソテーを切り分けていると、突然周囲が静かになった。

あ、でも、用覚めたわたしはこの国にとつて貴重な観光資源なんだけ。

だとしたら、わたしが元の世界に戻るのは彼らにとつて不利益なんじやないかな。

「……もしかして、帰れないってことはないよね？」

言つてだんだん不安になってきた。

ひょっとすると元に戻れずに、ずっとイルーシャのまま、とか……。

「……一応、過去にそういう例がないか調べてみるよ。心配だらうけど、できる限りのことはするから、そんな顔しないで」

キースが慰めるように言つ。

わたし、そんなに情けない顔してる？

「しかし、妙な期待を持つより、帰れないと思つておいた方が賢明ではないか？ そんなことを考えていたら、いつまでたつてもこの環境に順応できないぞ」

「な……」

カディスの言葉は正論だらうけど、酷すぎる。

いきなりこんなことになつたわたしの気持ちなんてカディスには分かんないよ。

「陛下……、それはあまりにも……」

ダリルさんがカディスを諫める。

「カディス、言い過ぎだよ。それに帰れないと決まつた訳じゃない」「だがな、キース、おまえも言つっていたではないか。この女はこの

国にとつて貴重な観光資源なのだと。ならば、無理に帰すこともないだろ?」「うん

なにそれ、一度と田覚めるなつて言つたのはカディスじゃない。それを……今になつてそんなこと言つの?

「それは言つたけど、なにもこんな時に言つとはないだろ?」カディスはすぐ意地悪だ。いくらわたしを嫌つてるからつて、こんなのがて酷すぎるよ。

気が付いたら、わたしはぽろぽろと涙をこぼしていた。

「ユーチー

みんなの前でみつともなく泣き出しちゃったわたしは恥ずかしくて顔を覆う。

「んなことで泣くなんてどうかしてる。

「う、ごめんなさい、わたし……」

「……なにを泣いている。別に泣くようなことではないだろ?」なぜか動搖したような声でカディスが言つ。

「イルーシャ様」

控えていたリイナさんがわたしにハンカチを差し出してくれた。それをありがたく借りて田元に当てる。

「わ、わたし、もう部屋に戻るね。食事じゅうやつをま

いたたまれなくつて、わたしは席を立つ。

「……部屋に送るよ。リイナ、付いててあげて」

「かしこまりました」

キースが移動魔法を唱えて、わたしは自分に割り当てられた部屋に戻つた。

「……イルーシャ様、なにかお飲みになりますか?」

「うん、いいです。ごめんなさい、今日はもう休みます

「……そうで」「え」ますか。ではお召し替えを

着ていたドレスを脱いで、リイナさんに寝間着に着替えさせてもらつた。わたしはそのまま寝室に向かつ。

「おやすみなさい。……今日は」「めんなさい」

「……イルーシャ様が、お気になれる」とはなこのですよ。それではおやすみなさいませ。明日の朝、また参ります」
優しくそう言つてくれて、リイナさんが退出する。
わたしはベッドに沈みこむと、枕に顔を押しつけ声を殺して泣いた。

会いたい。

普段は怒氣のようと思つてたのに、こんなことになつた今になつて、無性にお父さんとお母さんに会つたかった。

帰りたい、うちに帰りたいよ。

手抜きでもなんでもいいから、お母さんの料理が食べたい。

これが夢じやないとしたら、向こうのわたしの体はどうなつてゐるんだろう。

「由希いいい つ……」

誰かが絶叫する声で、わたしははつと目が覚めて起き上がる。まだ起きるには早い時刻らしく、まだ周囲は薄暗い。

なんだか嫌な目覚め方。

あの声、どこかで聞いたことある気がするんだけど誰だつ? キドキしている胸を押さえながら考えて、あれがお母さんの声だといふことに気が付いた。

家族のこと考えながら眠つたから、あんな夢見たのかな。今頃わたしの体、どうなつてるんだろ。

イルーシャ姫みたいに眠つたままか、最悪、意識不明とか……? そうだとしたら早く帰らないと。

いくら放任の両親でも、心配かけてるだらうな。

溜息をついてから、もつ一度寝ようと横になる。けれど眠気はもう訪れず、周囲が明るくなるまで、まんじりともしないでわたしは

ただ時間が過ぎるのをベッドの上で待つた。

「失礼いたします。イルーシャ様、起きていらっしゃいますか？」

「あ、はい。起きます」

リイナさんに声をかけられて、わたしは豪華な天蓋付きのベッドから這い出た。

「キース様からお花が届いておりますよ」

キースって本当にまめな人だな。

花瓶に生けられた青を基調とした花を見て、ちょっと気持ちが浮上する。

今日はシェリーさんにお風呂に入れてもうった。ちなみにシェリーさんは淡い栗色の髪と瞳の美人。

シェリーさんと呼んだら、シェリーとお呼びくださいと言われて戸惑った。

「ユーニスやわたくしも是非そそうお呼びください。イルーシャ様、わたくし達には普段通りの口調で良いのですよ」

リイナさんにそう言わたので、わたしと歳が近いシェリーさんとユーニスさんは、さん付けをやめることにした。

さすがにリイナさんを呼び捨てにはできないと言つたら、苦笑されながら承諾してくれた。……ああ、良かつた。

朝の支度と食事を終えて、アッサムミルクティーに似た感じのお茶を飲んで一息入れる。

こりんとした丸い形の茶葉はスペイスやミルクと一緒に煮込んでチャイみたいなお茶にすることもあるそうだ。

「コーヒーはないんだろうかと思つてリイナさんに聞いてみたら、どうやらないらしい。残念。

「イルーシャ様、ブラッドレイ様とヒューリー様がいらしてますが、いかが致しますか」

ああ、昨日会つた騎士団長の人達か。

「あ、お通ししてください」

しばらくして、花束を手にした一人の騎士団長が現れた。

「イルーシャ様、ご機嫌はいかがですか」

「あ、はい。今日は大丈夫です」

そう返しながら、それぞれの団の名を表す花束を受け取つた。

……それにしても、紅薔薇と白百合ってすごい団名だよね。

わたしが一人に座つてもうように促すと、シェリーが頬を赤く染めながら新たにお茶を淹れて持つてくれた。

ブラッドレイさんがお礼を言つと、シェリーはさらに真っ赤になつて慌てたように退出していった。いやはや美形の威力はすごいなとわたしは妙な感心をしてしまつた。

「あの……ブラッドレイさん、ヒューリイさん、昨日はすみませんでした」

わたしが昨日の非礼を詫びると、二人は微笑んだ。

「いいのですよ。イルーシャ様が気になさることではありません」

「あと、我々に敬語は必要ございません。どうぞ、ヒューリイ、ブラッドレイとお呼びください」

その美貌にあまり似合わない堅い口調でヒューリイさんが言つ。

「え……でも、わたし中身は庶民ですし」

年上のいかにも貴族然とした一人を呼び捨てにするのは気が引けた。

「陛下に敬称をつけていらっしゃらないのに、我々に丁寧な言葉遣いはまずいでしょ。……聞きましたよ、なんでも陛下を馬鹿と言われたとか」

ブラッドレイさんが多少砕けた口調で冗談めかして片目を瞑る。

「あ、あれは……つ」

確かにあれは自分でも暴言だったと思つ。

カーッと顔に血が上るのを感じて、わたしは頬を押さえた。

「あれは、カディスが失礼なこと言つから……つ」

「……失礼なことですか？」

「なんでも、わたしはカティスにとつて迷惑な存在らしいですよ。とつと塔に戻つて眠りにつけ、そして一度と田覚めるなと言わされました」

「それは……酷いですね」

ヒューイさんが額に手を置いて唸るように呟いた。

「陛下も物言いが少しきつ」ところがありますからね」

「……少しだすか？」

「いえ、かなりですね」

わたしの疑問にブラッドレイさんが苦笑いを浮かべて訂正する。

「イルーシャ様、先程も言いましたが、我々に丁寧な言葉はいりませんから。できればブラッド、ヒューと呼んでいただけだと嬉しいですね」

「分かりま……、うん、分かった。じゃあ、わたしにももう少し碎けた口調で話してくれると嬉しいな」

「イルーシャ様がそいつだったのでしたら。公式の場では無理ですけどね」

「うん」

堅苦しいのは苦手なので、わたしはほつとする。

「あ、そういうえばカティスのことなんだけど、よりによつてなぜ俺の代で目覚めるんだつて言つてたけど、どういう意味なのかな？」

わたしがそう聞くと、一人は一瞬の間を置いて、お互ひの顔を見合せる。……いつたいなんだ？

「……それは、世論があなたを陛下の妃にと押すからだと思いますよ」

「はあ？ なにそれ？」

想像を超えた話にわたしはぽかんとする。

「……この国では結婚歴のある人間を王妃にできるの？ 普通無理だよね」

「……そうですね、普通は無理ですね」

ヒューがわたしの言葉に頷く。

「わたしの世界の他の国の話だけれど、離婚歴のある女性と結婚するためには退位した国王がいるよ。王冠を賭けた恋と呼ばれてるけど」「王冠を賭けた恋か、なんとも情熱的な話ですね」「

ブランドが意味ありげに流し田をくれる。

……なんだろ？

「ブランド、イルーシャ様にまで色々を使つのはやめな」「あ、そういうことなんだ。

「気にしてないから、大丈夫だよ」

「……え、少しは気にしてもらえると嬉しいのですが」「いろいろな肩を落としたようにブランドが呟いた。それを無視してヒューが続ける。

「……話を戻しますが、この国は他の国と違つて特殊な事情があるんです。イルーシャ姫が目覚めたら、その代の王か王子が姫と結ばれると言われています」

「へえ、そなんだ」

……あれ、今なにか変なこと言わなかつた？

もう一度、ヒューの言葉を思い返す。

イルーシャ姫と、王か王子が結ばれるとかなんとか。

イルーシャ姫はわたし。王はカティス。……ってことは、カディスとわたしが結婚するってこと？

「え、ええええ？」

「イルーシャ様、反応が遅すぎます」

ヒューのその突つ込みにも激しく動搖したわたしは言い返すことことができなかつた。

「カディイスと結婚なんて冗談でしょ？」

まあ、向こうもそう思つてると思つけど。

「イルーシャ様、そうは言いますが、民意といつもの無視できなものですよ」

「それはそろかしれないけど、お互に嫌いあつてゐるのに、結婚なんて無理でしょ」

真面目に言つてくるヒューに、正直唸りたい気分で私は返す。

「……陛下のことがあれいなんですか？」

「ああまで言われて好きになる方がどうかしてると思つけど。わたしにとつてカディイスは天敵だよ」

「天敵が、これはいい」

なにがいいんだかよく分からぬけど、ブラッドが膝を叩いてウケている。

「まあ、陛下はそこまであなたを嫌つてゐるわけではないと思ひますよ。いや、むしろ……」

「むしろ……、なに？」

意味ありげに言葉を濁すブラッドにわたしは首を傾げると、彼はふつと笑つて首を横に振つた。

「いや、俺が言つようなことではありませんね。もしかしたら、そのうち陛下からなにかかるかもしませんよ」

「……なにそれ？ 全然訳分からぬいよ」

「いいんですよ、無理にお分かりにならなくとも。では、そろそろ我々はおとましますよ」

えええ？ ちょっと、それって言つ逃げじゃないの？

「おい、ブラッド」

「おまえにはきちんと説明してやるから」

やう言つて、せき立てるよにブラッドがヒューの肩を軽く叩い

た。

「それでは失礼します、イルーシャ様」

「失礼いたします」

ブランドとヒューがそれぞれ騎士の礼をして部屋を退出する。

「……なんなの？」

一人残されたわたしは疑問符だらけだ。

そんなところに、シェリーがやってきた。なんでも、エトール侯爵令嬢のアイリン姫がわたしに面会を求めているという。

……なんだか来客の多い日だなあ。

面識はないけど、身分の高い人みたいだし、会った方がいいのかな。

そう思つて通してもひりひりと言つと、しばらくして鈴を転がすような声が響いた。

「まあっ、伝説の姫君が目覚められたという噂は本当だつたのですね！ おどき話にある通り、本当にお綺麗な方！」

現れたのは金髪碧眼のお姫様。

うわあ、可愛いなあ。

いかにも純真無垢そうな可憐な姫に、わたしは目を細める。

わたしは一日でこの可愛らしい姫が気に入ってしまった。

「はじめまして。エトール侯爵の娘、アイリンと申します。イルーシャ様、よろしくお願ひ申し上げます」

「こちらこそ、よろしくお願ひいたします」

わたしも見よう見まねで挨拶を返す。それからアイリン姫に席に着いてもらつた。

シェリーに女の子が好きそうなお菓子とお茶を出してもらつて、わたしとアイリン姫のお茶会が始まつた。

「実はわたくし、目覚めたばかりで記憶が抜け落ちておりますの。ですから、伝説の姫君などと呼ばれて少々戸惑っています。もしよろしければ、その伝説というものをお話頂けるとありがたいのですが」

けれど、「

わたしのお姫様言葉、変じゃないよね？

この言葉遣いは疲れるけど、アイリン姫にとつては、わたしはあくまでイルーシャ。伝説の姫君なのだ。その姫君のイメージを崩すようなことは、なるべくしないようにしようと。

でもまあ、わたしの即席お姫様言葉はどうやらアイリン姫に通用したようだ。

アイリン姫は瞳を見開いて、まあ、と頬に手を当てる、お氣の毒に、と呟いた。

アイリン姫の口から紡がれたのは、五百年も昔の物語。悪い魔法使いに眠りにつかされた王妃が、再び半身たる王に巡り合つて待つているというおどぎ話だった。

それに加えて、この国ではイルーシャ姫が目覚めれば、その代の王か王子がアークリッド王の生まれ変わりであるということが通説のようになつていて、王が目覚めると、その代の王が生まれ変わるようになつていて、王が目覚めると、その代の王が生まれ変わることも話してくれた。

ああ、だからカティスはわたしによりによつて俺の代でと言つたんだ。

そんな人物が突然目覚めたら確かに鬱陶しく思うだらう。
だからって、あの態度はどうかと思うけどねー。

「あの……大変不躾ではありますけれど、本田はわたくし、イルーシヤ様にお願いがあつて参りましたの」

「…………お願いですか？」

わたしがその先を促すように首を傾げると、姫は自分の手をきゅっと握りしめて思い詰めたように言った。

「はい、実はわたくし、陛下の妃候補なのです。ですが、わたくしには事情がありまして、なんとかそれを辞退することはできないものかと考えまして……。そんな時にイルーシャ様が目覚められたと聞き及びましたので、図々しくもじからに押しかけて参つた次第ですの」

なんでも、アイリン姫には幼馴染みに想い合つてゐる人がいるらしい。

同じくらいの家格らしいので、その人と結婚するのはなんの不都合もないらしいのだけど、婚約を発表しようとした矢先にカデイスから姫の父親へ輿入れの打診があつたらしい。

その為、幼馴染みとの婚約話は立ち消え。

王と普通の貴族じや、王の意志が優先されるに決まつてるものね。「イルーシャ様が目覚めてくださつて、本当に助かりましたわ。もうわたくし達、二人で駆け落ちする覚悟までしておりましたもの」駆け落ちする覚悟つていつたら相当だよね。今までなに不自由なく生活していた家や家族を捨てるほど覚悟。わたしには好きな人がいたことないから、その気持ちよく分からぬけれど。

「それほどまでに想い合つてゐるのなら、わたくしが王に事情を話しますわ。言ってお分かりにならない王ではありますんもの。大丈夫、姫が心配なることなど、なにもありませんわ」「イルーシャ様……」

「うむ」と瞳を潤ませてアイリン姫がわたくしを見つめる。

「う、可愛いなあ。わたしが男だったら、絶対惚れてたね。

それにしても、カデイスは失恋確定だよね。ざまあ、なんて思うほどわたしは鬼ではない。いやちょっとだけ思つたかも知れないけど。

それから、わたしに何度もよろしくお願ひしますと言つて、アイリン姫は帰つていった。

「うう、疲れたあー」

誰もいない部屋でわたくしは延びをした。

本当、慣れないことはするもんじゃないわ。

ちよつとだらしなく長椅子に寝そべつながら、これからのことを考える。

「」のまま寝室に行つて寝てしまおうか。

「んー、どうしようかなあ……」「でもカディスに姫の事情を話すつてアイリン姫と約束したんだよなあ。やつに会つのは気が重いけど、つと、やつぱり約束は守らないとね。

「……よしつ

気合いで入れて、長椅子から立ち上がる。

天敵であるカディスにこれから立ち向かうため。

そんなわけで、わたしは今、王の執務室の前にいる。

ドアの前には私と同じくらいの歳の近衛騎士が立っていた。栗色の髪と青い瞳はどこかで見た色彩だ。

「あれつ、ひょつとしてあなた、リイナわんの

「はい、息子です。イルーシャ様には、母がお世話になつております

「いやいや、お世話になつてるのはこつちだから

近衛に息子がいると聞いてたけど、ダリルさんに似ててかっこいい。もうちよつとすると、男前と騒がれそうな容貌だ。

名前はマーティンと言つらしに。歳は私より一つ下の十八歳。マーティン君と呼んだら、君はお止め下さいと嫌がられた。仕方ないので、心の中だけでマー君と呼ぶことにする。
「カディスに会いたいんだけど

マー君に取り次いで貰つて、部屋に入つた途端、こつ言われた。

「またおまえか

なにおつづ！？

聞こえよがしに溜息までつかれて、臨戦態勢に入りそうになつた

わたしは、はた、と思いとどまつた。

いけない、いけない。わたしはアイリン姫の結婚話についてカディスを説得しに来たんだつた。

「あの、アイリン姫のことなんだけど」

「……なんだ、会つたのか？」

「うん、さつきね。あの、姫には他に好きな人がいるんだつて。でもその人と一緒になるには、もう駆け落ちするしかないと想い詰めてた。だから、姫との結婚を考え直してくれないかな？」

「好きな人がいる、か。それがどうしたというんだ。王族や貴族の結婚は、恋愛感情などとは無縁のものだ。おまえには政略というものがどういうものか分かつていらないようだな」

「でも、少なくともカディスは姫のこと好きだよね？」

わたしがそう言つと、カディスは少し不愉快そうに眉を顰めた。「好きとか嫌いとかでの問題ではない。本当に口の減らない女だな、おまえは」

うわつ、なんか言つちゃいけないことだつた？ あんな可愛い姫なら好きにならないわけはないと思つて、つい言つちゃつたけど。「……そうだな、どうしてもと言つなら、考えてやらなくもないぞ」「え、本当ー？」

思わず、わたしは色めきたつた。

なんだ、カディスつてば結構話分かるじゃない！

「アイリンが駄目なら、おまえが代わりに王妃になることになるが、それでもいいか？」

「え……？」

思わず頭の中が真っ白になる。

なにを言つてるんだこの男はーー！？

「ななな、なに言つて……つ、わたしが王妃になれるわけないじゃないつ。だ、だって、わたしはひ、人妻ですからーー！」

昔の王の妃だったなら、そうだよね？ あ、この場合、正しくは未亡人か。

叫ぶように言つたら、カディイスがくつと笑いだした。

「おまえほど人妻といふ言葉が似合わない女もないな。落ち着きが全くな」

そんなことないと言えないのが、ちょっと哀しい。どうせわたしには人妻の色気なんかありませんよ！

「確かに色気はないが……まあ、それは追々どうにかなるだらう」「はあ？」

意味が分からず、思わず首を傾げてみると、カディイスに腕を引っ張られた。そのままカディイスの腕の中に閉じこめられると、カディスは感心したように言つた。

「おまえは抱き心地がいいな」

「つー？」

はいーつー？ ちよつとあなた、どうしちゃったんですか！？

突然の事態に混乱するわたし。

そんなわたしの気持ちもお構いなしに、カディイスの大きな手が背中を滑る。その途端、ぞくりとした感覚が背筋に走った。

思わずびくりと反応してしまったわたしに、カディイスがにやりと笑つた。

「なんだ、ここが弱いのか？」

「なに人の背中撫で回してるのよ、このセクハラ大王！ 離せえええっ！」

「なにを言つてるのか分からんが、とりあえず嫌がつてるのは分かつた」

「分かつてゐのなら、ひとつ離しなさいよー。この馬鹿 つー」

「何度も俺を馬鹿扱いするのはおまえくらいだな」

滅茶苦茶に暴れるも、カディイスの腕は緩まない。
本当にもう、嫌だああああ！

「カディス、いい加減にしどきなよ。嫌われるよ」
突然声が響いて、空中からキースが現れた。

いや、もう嫌ってたから！

カディスもそのはずなのに、どうしてこうなったんだ。
……どうか、嫌がらせか。嫌がらせなんだな？

「キース、助けて！」

「はいはい、お姫様」

キースがわたしの手をとつて、カディスの腕から救い出してくれた。

……が。

なぜかキースはそのまま腕を引いて、わたしをぎゅっと抱きしめた。

「ああ、本当に抱き心地いいね」

なに、そのセリフ。

ひょっとして今までのやりとりを黙つて見ていたわけ？

「おまえものぞき趣味とは悪趣味だぞ」

「いやあ、おもしろうだから、ついね」

じゃあなに？ わたしが困つてゐるのを見て楽しんでたつてこと？
わたしをのけ者して話す一人に、わたしはワナワナと震えた。

「人とも、わたして遊ぶな
つ！」

そうわたしが叫んだのは言つまでもない。

「それで、結局アイリン姫との結婚は考え直してくれるのか？」

「かなり軌道から外れたけど、わたしはアイリン姫のことカディスに会いに来たんだつた。

「だから、おまえが俺のきわ……」

「却下。断固拒否。お断りします」

「……まだ今まで言つてないぞ」

カディスがなんかほざいてるけど、やつの言いそつなことは大体分かる。

聞いてしまって、またからかわれるのはごめんだ。

でもこれつて、こっちの一方的な願いなんだよね。結婚の申し込みをなかつたことにしてつて言つて、はい分かりましたつていうわけにはいかないか。なにか取引に使える材料……あ、そうだ。

「そう言えば、わたしのこと観光資源とか言つてたけど、見せ物にでもなるわけ？」

歯に衣着せずに聞いたわたしに、キースが苦笑した。

「まあ、ある意味そうかもね。國民に姫が目覚めたことを知らしめす必要があるから」

「世間一般には、あくまでもイルーシャ姫として振る舞えつてことだよね？ でも、わたし、こここの礼儀作法とか知らないけどどうするの？」

「それについては、君に学んでもらひしきないね」

……やっぱりそうなるか。

「下働きとかで雇つてくれても良かつたんだけどなあ むしろそつちの方がわたしの性にあつてている。姫とか、どう考えても柄じゃない。

「その容姿じや無理だろ」

「うん、無理だね。むしろ現場が混乱すると思うからやめてほしこ

ね

容赦なく一人に言われて内心肩を落としながら、わたしは自分の白い手を観察する。

これはどう見ても水仕事なんかしたことありませんって手だよなー。爪まで綺麗に磨かれてるし。

「……分かった、イルーシャ姫として振る舞つ。ただし、条件があるんだけど、いいかな？」

「なんだ？」

「アイリン姫の輿入れの件は白紙に戻すこと。代わりにわたしが王妃に、とかふざけたこと言わないこと」

「そんなのでいいの？ 欲がないなあ」

驚いたようにキースがわたしを見る。

いや、ここ大事なとこだから！ 無理矢理王妃にされたらたまたものじゃない。

それに、アイリン姫にカディスを説得するつて約束したしね。

「ふん、俺もアイリンに駆け落ちされてしまつたら醜聞になるしな。仕方ない、承諾しよう」

……やつた！

どこまでも偉そうにカディスが言うのも、この時ばかりは気にならなかつた。

浮かれたわたしは、ついカディスの手を取つてぶんぶん振つてしまつ。

「良かつたあー。カディス、ありがとう！」

「あ、ああ……」

なんかカディスが引いてる氣もするけど、まあ気にすることもないか。

アイリン姫、喜ぶだろ? なあ。
良かつたね、姫。

わたしはここにこしながら、また伺いますと言っていたアイリン姫の愛らしい顔を思い浮かべる。

「なんと言つたか、君つて最強だよね」

溜息とともにキースに言われたけど、どうこう意味だつたんだろう、謎だ。

わたしは一仕事終えた気がして、上機嫌でお風呂に入つていた。もう侍女さん達にお風呂に入れでもらうのも恥ずかしくないよ。慣れつて怖いね！

「イルーシャ様、なにか良いことでもあられたのですか？」

シェリーとユースにそう尋ねられたので、アイリン姫のことを一人に話した。

「まあ、それは良いことをなされましたわ、イルーシャ様！」

「アイリン様もきっとお喜びになられるでしょうね」

二人が褒めてくれるのをわたしはここにこにせんやの中間くらいの顔で笑つて受け止めた。

お風呂に入つている間にシェリーに渡された冷たいお茶を口に含むと、火照った体が少し静まるような気がした。うーん、至れり尽くせりだなあ。

「でも、そうしますと、陛下のお相手がまたいない状態になつてしまひますわね」

「あら、シェリー、イルーシャ様がいらっしゃるじゃない」

ユースのその言葉に思わず噴き出しそうになつて、わたしは慌てて口に含んだお茶を飲み込んだ。

「いや、それはないから！」

「でも、イルーシャ様が一番の有力候補なんですよ。なんといっても、伝説の姫君なんですもの！」

うつとりと胸の前で指を組み合わせて、ユースが言つ。

「あら、でも伝説には必ず王族の方と結ばれるとはありませんわよ」「え、そうなの？」

てつくり王か王子と結婚しなければならないと書いてあるものだと思つてたけど、そうじやないらしい。

わたしが聞き返すと、シェリーは神妙に頷いた。

「そうですわ。ですからイルーシャ様がどなたを選ぶのかは『自由なのです。わたしのお薦めはキース様なんですけど』

「……はい？」

なんでここでキースの名前が？

「当代一の魔術師で、現国王の従兄弟。身分に不足があるとは思えませんし、イルーシャ様とともにお似合いですわ！」

夢見る乙女の表情でシェリーが力説する。

キースって国王にタメ口だから偉いんだろうなと思つてたら、従兄弟だったのか。なんか納得。

「あら、でしたら陛下も負けたまぜんわよ。陛下は剣を取らせたら誰にも負けませんもの！」

負けじとコーニスが拳を握つて叫ぶ。

二人の意見が白熱するのをわたしがただ呆然と聞いていたけど、だんだん限界が近づいてきた。

「……とうあえず、もう上がつていいかな？　いい加減のぼせそつ

百合の花と白い菊の花が見える。

聞こえてきたのは、幼い頃からよく知つてゐる近所の人の声。

「原田さんのところの由希ちゃん、まだ二十歳前だつていうのに、かわいそうにねえ」

「残された家族も氣の毒よねえ」

なにを言つてるの？

それじゃまるで、わたしが死んだみたいじゃない。

高いところから落ちるような感じがして、びくつとして田を覚ますと、また昨日と同じ夜明け前だつた。

なんだか連續して嫌な夢見たなあ。

夢の中でわたしが死んでるとか、「冗談にしても笑えないよね。豪華なベッドの中で溜息をついて、わたしは寝返りを一つ打つ。わたしが穴を開けたバイトとか、どうなつてるんだらう。行けなくなつた連絡はお母さんがしてくれるだらうけど。
なんだか泣きたくなつてきて、わたしはシーツを引き被る。そして、少しだけ泣いた。

「おはよひざこます、イルーシャ様」
着替えと朝食を終えたわたしを待ち受けっていたのはH室お抱えの教師達だつた。

早速今日からか。カティス、仕事早すきるべー！ 今日へりいはむつくりしていたかつたのに。

とりあえずわたしが学ぶのは、礼儀作法と語学と、歴史。これだけでも、わたしにはいつぱいいつぱいだ。

けど、中学や高校でもこんなに勉強したことはないほど、わたしは頑張つた。

「イルーシャ様、大丈夫でござりますか？ あまり根を詰めないでくださいましね」

口調は丁寧だけど厳しい先生にじごかれ、午後の休憩時間にはすっかりぐつたりしていたわたしをリイナさんがいたわつてくれた。

「ありがとうございます」

なんというカリイナさんは、母親を連想させる。

といつても、うちのお母さんは放任だったから、リイナさんはわ

たしの理想の母親像に近いのかかもしれない。

そんなことを考えながら、リイナさんが入れてくれたお茶を飲んで一休みする。

ああ、「コーヒー飲みたいなあ。

紅茶も悪くないけど、コーヒーのが好きなのよ。でもなければしようがない。

「なんだ、一日田で既にへばつているのか」

そう言つてずかずかと部屋に入つてきたのはカティス。

一応女の部屋なんだから、少しは遠慮しない。

「ちょっと、ノックくらいしなさいよ」

「リイナには断つたぞ」

部屋の主に断れよ！

思わず顔がひきつりそうになる。

そのリイナさんはカティスのお茶の用意に行つてしまつたりして、ここにはいない。

「わざわざわたしの部屋に来るなんて、カティスって暇なの？」

「暇ではないが、おまえがきちんと学んでいるか確認する必要があるからな」

思わず喧嘩腰になつてしまつたわたしの言葉に顔をしかめながらもカティスが答える。

「そんなことしなくともちゃんとやるよ、約束だし」

「そうか。是非ともこれからもそうあってほしいものだな」

くうつ、なんて嫌味なやつだ！

せつかくの休憩なのに、よけい疲れた気がする。

ちよつとぐつたりしてると、お茶の支度をして戻ってきたリイナさんが戻ってきた。

「まあ、イルーシャ様、陛下とすっかり仲良くなられたのですね。さすがイルーシャ様ですわ！」

なにがさすがなのか分からなければ、激しく勘違いされてしまうと思つるのは、わたしの気のせいだろうか。

「ああ、仲良くなつたぞ。ほら、この通りだ」

そう言つと、カティスはわたしの隣に座つて、わたしの肩を抱き寄せた。

「まあつ、そこまで仲良くおなりになつて。素晴らしいですわ！」

こいつ、後で絶対殴つてやる。

わたしはテーブルの下で拳を固めた。

「それでは、わたくしは下がらせていただきますね。ビーチ、『ゆるりとしてくださいませ』

ちょっと、リイナさん、変な気を回さないで！

リイナさんがこの場を去つたことで、わたしはカティスと二人きりになる。

早速拳を振りあげてやつたけど、残念ながらカティスにあつさりかわされた。ちえつ。

「凶暴な女だな、おまえは。姫君は拳で殴りかかるぞ。姫として振る舞うと自分で言つたのをもう忘れたのか」

……うつ。

カティスの言葉に思わずつまつてしまつたわたしだつたけど、……いやいやいや。

「そつちが嫌がらせするからでしょ。わたしを嫌うのは分かるけど、いい加減にしてよね」

わたしがそう言つと、カティスはなぜか瞳を見開いた。

なに、その驚いたような顔は。

「……別に嫌つてはいない」

「嘘でしょ」

「なぜ速攻で返すんだ。……別に嘘はついていないし、その必要もない」

「でも、嫌がらせしてゐじゃない。いちいち嫌味言つてくる」

嫌味に関しては、まあ、わたしの方も酷いけどね。

そう言つと、カティスはくしゃりと前髪を搔きあげ、溜息をつい

た。

「それは、なんだその、おまえの反応がおもしろいからだ」
おもしろいって、なんだ！

勢いよく長椅子から立ち上がりかけたわたしだけど、手をカディスに引かれ、あつと思つたときには彼の胸に転がりこんでしまつていた。

「ちょっと……っ」

カディスの膝の上に座る形になつてしまつたわたしの背に彼の手が回される。

ちょっと、どうなつてゐる、これーっ！？

背中に回されたカディスの手に力がこもり、わたしは息を止めてカディスを見つめてしまつた。

「どうしてだらうな、伝説の姫君など面倒な存在だと思つていたと
いうのに」

そう言つカディスの藍色の瞳が揺れる。

な、なんかおかしなことになつてる気がする。

リイナさん、お願ひ今すぐ帰つてきて！

わたしの願いもむなしく、カディスの手がわたしの顎をそつと持ち上げた。

「、これはひょつとして。

や、やだ……！」

カディスの顔が近づいてきて、わたしは思わずギュッと口を開く。
ひょつとして今の感触は……キス？

突然のことに呆然としていると、なぜかカディスは苦しそうな顔をした。

「そんなに俺を怖がるな」

「む、無理だよ、なんでいきなりこんなこと……」

するの、と言おうとしたその時、ドアをノックされる音が響いた。

リイナさん帰つてきてくれたの！？

「はいはいはいはいっ！」

カディスの腕が緩み、天の助けとばかりに元気よく返事してわたしは立ち上がつた。

部屋に入つてきたのはリイナさんじゃなくてキースだつたけど、まさに天の助けとはこのことだ、キースありがとうーー！

「なぜおまえはこの頃会になつて来るんだ」

カディスが唸るように言うと、キースが眉を上げた。

「君がなにを言いたいのか分からんんだけど。カディス、僕はそろそろ仕事してほしいと言いに来ただけだよ。報告書がたまつて後で苦労したいなら退散するけど」

その言葉で観念したらしいカディスは、溜息を一つつくと立ち上がり、わたしの方を向く。

「また来る。覚悟しておけ」

か、覚悟つてなんですか！？ とっても知りたくないんですけど一つ！

混乱するわたしに、事態を察したらしいキースが声をかけてきた。

「……大丈夫？」

「ごめん、たぶん大丈夫じゃないです。」

それから後の授業は、散々だった。

カディスが残していった言葉が気になつてつい上の空になつてしまつて、先生にしかられるし。

ひょっとして、あれはわたしをからかっただけだつたりして。

……そうだとしたらカディスめ、どうしてくれる。せつかくまじめに勉強しようとしてるのに。

ぐたつとして長椅子に寄りかかつていると、リイナさんがキースからの伝言を伝えてきた。

今日の夕食をカディスとキースと一緒にどつかとのお誘い。

体は鉛のように重くて正直疲れていただけど、わたしはキースの誘いを受けることにした。

この間の晩餐会は途中で退席しちゃつたし、わたしも彼らに確認したいことは山ほどあるしね。

というわけで、わたしは今ガルディア国王カディス・ディーン・ディレグ・ガルディア陛下と、同じくガルディア国魔術師師団長キース・ルグラン・レグ・アレギリアとの晩餐会に参加中だ。

キースは前国王の弟であるアレギリア公爵の嫡男なんだつて。ちなみに魔術師としては、百年に一人出るか出ないかの逸材だとか。どんだけ天は人に二物も三物も与えるんだ。

「すごいなあ。わたしも魔法とか使ってみたいな」

「よかつたら教えようか。魔力はありそうだし、簡単なものなら使えるんじゃないかな」

「本当！？ じゃ、教えて」

「うん、いいよ」

やつたあ。言つてみるもんだね。

「おー」

キースに約束を取り付けてにこにこしてると、不機嫌そうな声が前の席から響いた。

「さつきから、なぜキースの方ばかりみて話すんだ、おまえは」「え、ええ……？ な、なぜかな？」

カディスに声をかけられて、つい拳動不審になるわたし。ついさつきのことで、非常に気まずいんだけど。

「いきなりせまられれば、それは避けられても仕方ないと想ひよ」
ひいつ、キースつてばそんな核心を突くようなことをつ。
なんでカディスがあんなことしたのか聞きたいけど、なぜだか聞いたら後悔しそうな気がするんだよね。

うう、おかげでせつかくの食事の味がよく分からなくてもつたいない。

「口づけたかったんだから、しようがないだろ！」

「な……っ」

カディスの爆弾発言に、わたしは思わず持っていたナイフとフォークを皿に落としてしまった。

「なんつてこと、あつさり言つのよーっ！」

「本当だね、我慢というものを知らないことを公言するなんて獸と一緒にだね。危ないから近くに寄らない方がいいよ」

「正直に話しただけだろう。むしろキース、おまえのような腹に一物ありげなのが一番たちが悪いんじゃないかな？」

「……君は僕に喧嘩を売っているのかな？」

「うわあ、なんだか剣呑な雰囲気だ！」

わたしは慌てて話題を変換ことにした。

「ねえ、昼間先生に教わったんだけど、こいつて結構大きな国なんだよね？」

「ああ、この大陸では一番大きいぞ」

「「」の気候ってどんな感じなの？今は春みたいだけど」

「」の国の気候は一年中こんな感じだよ。他の国に行くと「」はないみたいだね。暑かつたり寒かつたり色々だよ」

「一年中春……。私の頭に某漫画が浮かんだ。

「じゃあ、常春の国ってこと？」

「常春の国か、いい表現だね」

「思っていたが、おまえ、割りに学があるな」

……元ネタがギャグ漫画だということは言わないでおこうとわたしは心に決めた。

「……日本には九年間の義務教育があるから。わたしはそれから三年間高校に通つたけど」

それで結局フリーターやってたんだけどね。学校の勉強が役に立つたと思ったことってあんまりないなあ。

「九年の教育が義務なんだ。すごいね」

「え、そうなの？」

当たり前すぎて、そのすごさがいまいち分からない。

「ああ、すごいぞ。この国も三年の教育を推奨してはいるが。それも義務ではないしな」

「へえ……、実は日本ってすごかつたんだねえ。そういうえば、日本語の識字率はほぼ百パーセント……ほぼ完璧らしいよ」

「それは民間人も含めて？二ホンって国はどのくらいの人口なの？」

「日本人全般でだよ。人口は一億二千万人超えてる」

わたしがそう言つと、一人は絶句した。

「……一応確認するけど、桁を間違てるわけじゃないよね？」

「間違えてないよ。一億二千万人で合つてる」

「おまえがいた国は島国と言つていたが、実は大陸の間違いじゃないのか？」

「ううん、島国で合つてるよ。南北に細長くて国土は狭い、……あ

あ、地震大国でもあるかな」

「……地震とはなんだ？」

見るとカティスが不思議そうな顔をしている。

「あれ、地震知らない？ 地面が揺れるの」

「……よくそんなところで生活していられるな。落ち着かないだろう？」

「多少の揺れくらいなら平気だよ。みんな慣れたものだよ。だってそれが日常だもの」

「……聞けば聞くほど、二ホンって訳が分からぬ国だね」

キースが感嘆したような溜息をつく。

「そんなに驚かれるようなことかなあ。わたしにとつては、四季がない方が驚きなんだけど」

春は満開の桜。夏は雨に濡れる紫陽花。暑い日差し、空に浮かぶ
人道雲。秋には紅葉。冬はいちめんの雪景色。

ああ、なんて綺麗な光景なんだう。

「いやつて思い出してみると、日本つて捨てたもんじゃないよね。

その後もわたしは一人の質問を受けて、時々じどりもどりになりながら受け答えをした。

「…………うあー、疲れたあー」

「…………このセリフ、昨日も言つてたような気がするな。

お風呂に入つて寝間着に着替えたわたしはふかふかのベッドに沈んだ。

「わたしに専門的なこと聞かれて、分かるわけないじゃない……

まさかの質問責めにたじたじになりながら晩餐会を退散したわたしは、溜息をつくしかなかつた。

質問していく一人は完全に施政者の目だったよ。……お願いだか

「一般庶民に多くを求めるでほし!」

ああ、でもわたしつて日本で結構恵まれた生活してたんだな。：

…こんなふうに失つてから分かることつてあるんだね。

ふいに涙腺が崩壊しかけて、わたしは無理矢理目を擦る。

もう寝よつ。そうしようつ。

疲れた体を休めるために、わたしは眠る。……それで真実を知つてしまふことになるとも知らずに。

目に入ってきたのは、いちめんの白い菊と百合の花。

泣いているお父さんとお母さん。

うちは共働きだったから、あまり構つてもらつた記憶はない。だ

から放任だとばかり思つてた。
けれど。

祭壇の前には、棺。

その中に誰かの遺体が安置されている。

綺麗に化粧された青白い顔。

棺に入れられているのは……わたし?

「それではお別れです」

無情に響く葬儀を取り仕切る人の声。

わたしを入れた棺は狭くて暗い穴の中に入つていく。

なにするの、やめて。

わたしは生きてる。ここに、今ここにいるのに。

お願い、待つて。

だって、わたしはまだ。

その願いも届かずに、わたしの体は炎に包まれる。燃えてしまつ。

わたしのからだ、わたしの体が。

無くなつてしまつー

「やだああつ！…」

感じるはずのない熱さを感じた気がして、思わずわたしは飛び起きた。

視野に入ってきたのは、未だ慣れない豪華な内装。

「あ……」

……嫌な夢。

よりによつて、あんな。

ぱたぱたと手元のシーツに水滴が落ちる。

薄暗い部屋の中、わたしは流れる涙を拭いつゝもどきゅーに、ただただ泣き続けていた。

「イルーシャ様……」

翌朝、わたしの顔を見たリイナさんは驚いたように瞳を見開いた後、冷たいタオルを持ってくれた。

「イルーシャ様、いつになにがあつたんですね？」

冷たいタオルをわたしの目に当てながら、心配そうにリイナさん

が聞いてくる。……よつぱんじ酷い顔してたんだらうな。

「なんでもないんです。……ただ、少し思い出してしまつただけで」「まあ……イルーシャ様、いろいろとお疲れなんですね。今日はお勉強を取りやめるよつに陛下に申し上げてきますわ」

「……ごめんなさい。お願いします」

自分でもかなり打ちのめされているが分かつてたから、リイナさんの申し出は正直とてもありがたかった。

その後、リイナさんはわたしを薔薇の花びらを浮かべたお風呂に入れて、明るい色のドレスを選んで着替えさせてくれた。

「今日一日、ゆつくりされたらい」と思こますわ。……ああ、そうですわ、庭園をじ覽になられるといきかど。じちりの庭園は花がとても綺麗です。イルーシャ様もきっと楽しめますわ」

わたしがリイナさんの提案に従つて、軽く朝食をとつた後、庭園を散策することにした。

「それでは、わたくしがじかうに控えておつまますので。じゆつくりどうぞ」

リイナさんのありがたい申し出に頷きながら、わたしがリイナさんを庭園のテーブルに残してゆつくりと歩きだした。

「本当に綺麗……」

きちんと管理されている庭園は、色々とびつの花に彩られていて、わたしが思わず感嘆の溜息をつく。

「じじは管理が行き届いてるからな」

聞き覚えのある声がして振り向くと、そこにはなぜかカティスが立っていた。

「どうして、じじ」

「リイナに言われた。おまえが沈んでいるよつだから、慰めてこいと」

リイナさん……、もしかして仲良くなつたというカディイスの言葉を本気にしてる?

「……昨日あの後、泣いていたのか?」

「泣いてないよ」

「昨日俺達が二ホンのことをあれこれ聞いたから、おまえは故郷を思い出したんだろう?」

今はそのことに触れてほしくなかつたのに。

わたしはカディイスから顔を背けると、また溢れてきそうな涙を堪えた。

「ユーキ」

カディイスがわたしのことを名前で呼んだのは初めてじゃないだろうか。

……でもやつぱりユーキになるんだね。

もう、わたしの名前を正しく呼んでくれる人はいないのかも。手を引かれて無理矢理カディイスへと向かされたわたしは、みつともない泣き顔を晒してしまつた。

「ユーキ、泣くな」

カディイスは苦しげに顔を歪ませると、私を抱きしめた。

「……無理だよ」

「ユーキ」

「そんな呼び方しないで。わたしはユーキじゃない。由希、原田由希だよ。ちゃんと呼んでよ」

「……すまない、俺にはユーキが言うように呼ばない」

わたしの無理な要求に、カディイスが謝つた。あの俺様なカディイスが。

わたしはカディイスに抱きしめられたまま、ぼうつと思つ。
「おまえが一人で知らない場所に放り出されて不安だらうと言つことに気がつけなくて悪かった。今もさぞ、心細いだろ?。……それでも、俺はおまえがここに来てくれたことを良かつたと思つてゐる」
……今、カディイスはなんて言ったんだろう?

わたしがここに来てくれて良かった？

わたしはカディスの胸に腕を突っぱねて、カディスから距離を取る。

「いくらなんでもそれは酷いよ、わたしは元の世界に帰りたいのに」「ヨーキ、おまえを傷つけるつもりで言ったのではない。……俺は、おまえが好きなんだ」

「嘘

「嘘じゃない」

「……嘘だよ。好きなら、なんでこんな酷いこと言うの？」

あまりのことに涙がこぼれる。

ひどい、酷いよ、カディスは酷い。

「……確かに、俺は酷いな。だが、おまえが傷つくと分かっていても、おまえを帰したくはないのだ」

「それは、わたしに利用価値があるからでしょ。だから、そんな言葉で誤魔化そうとしてるんだ」

「ヨーキ、それは違う」

延びてくるカディスの腕をわたしは避ける。

「なにが違うの、傷つくるのが分かつてて言うなんて……」

泣きながら、わたしはじりじりと後ろに下がる。

今はカディスの顔を見たくなかつた。

だから言つてしまつた。ただのハツ当たりだと分かつていながら。

「カディスなんて、大つ嫌いつ！」

わたしは身を翻すと、カディスから少しでも遠ざかるために走り出した。

「どうやらここ走つただれ!」

気がついた時には、わたしは広い庭園の中で迷子になっていた。

「わたし、なにをやつてるんだろう。」

きつとリイナさん、わたしを探してる。戻らなきや。

自分で自分が情けなくなりながら、手の甲で涙を拭う。

「おや姫君、こんなところでどうされたなんですか?」

ふいに声をかけられて、見るとそこにはダークブロンドの髪と、金の瞳の男の人が立っていた。

「誰だろ?」

なんとなく、キースと似通った雰囲気を持っている。……魔術師

団の人だろうか?

「あ、あの迷子なんです……」

いい歳してちょっと恥ずかしかつたけど、私は正直に告白した。

「伝説の姫君が迷子ですか?」

目の前的人は、おかしそうに笑いをこらえている。

「わたしのこと、知ってるんですね?」

「知ってるいるもなにも、巷では噂で持ちきりですよ、伝説の姫君が目覚めたら。……今実際に会つて、すぐにあなたのことだと分からりました」

「……そんなに噂になつてるんですか?」

そういえば、アイリン姫もわたしの噂を聞いて訪ねてきたんだつけ。

「ええ、まあ。例えば、儂げな絶世の美貌であるとか。姫君は口が悪く、王を『馬鹿』と罵つたとかですね」

「ええ……っ! ?」

まさかの言葉に、思わずわたしは赤くなる。

カティスを馬鹿つって言ったこと、そんなに広まつてゐるの? これ

じゃ、姫君らしく振る舞うなんて無理じゃない？

「それ、そんなに噂になつてるんですか？」

恐る恐る聞くと、その人は平然と頷いてくれた。

「ええ、結構有名ですよ。なんでもその時の叫びを聞いた騎士や侍女がいたそうで」

「うああああっ、なんてこと！」

わたしは頭を搔き箋つてこの場を転がり回りたい衝動に駆られたけど、人前でそんなことができるわけない。

「そ、そなんですか？」

なんとか平静を装いながら、わたしはひきつった笑みを浮かべた。

「　ああ、あとこれは秘密なんですが、姫君の中身は異世界人であるとか」

「…………」

さすがにこれは、あの時の晩餐会にいた人物しか知らないはずだ。

「　それなのに、なんでこの人は知ってるの？」

思わず目の前の人の顔を見返すと、その人はにやりと笑った。

善良そうな顔の裏に凶悪なものを見た気がした。

「　あなた、誰？」

「　この人は危険だ。

そう感じて、わたしは後ずさる。

「わたしの名は、ウイルロー。姫君、以後お見知りおきを」

ウイルローと名乗ったその人は、騎士の礼をとつてわたしの手に恭しく口づける。逃げ出したいのに、なぜかわたしは動けなかつた。

「　……ああ、せつから姫君と語らつていたのに無粋な邪魔が入つたようだ。それではまたお会いしましよう、イルーシャ姫」

そう言つてウイルローはわたしの目の前から姿を消した。

やっぱり魔術師だつたんだ。けど、あの惡意のある笑いは、いつたいなに。

「……ユーキ？」

ふいに声がして顔を上げてみると、田の前にキースが立っていた。

「キース、なんでここにいるの？」

あまりにもキースがタイミング良すぎる現れ方をしたので、つい聞いてしまう。

「カティスやリイナが君のこと探してたからね。僕は君の魔力を追つてここに来た」

「え、じゃ、キースにはわたしがどこにいるか分かるってこと?」「必要がなければ使わないけどね。だって嫌だろ? いつでも、どこにいるか把握されるなんて」

そう言うと、キースは自嘲するように笑った。

魔術師としては超一流だけど、キースはキースで、結構そのことで苦労してるんだろうか。

「……そうなんだ。ごめんね、探させちゃって」

「気にしなくていいから。……それはそうど、今ここに誰かいなかつた?」

「あ、うん、いたよ。ウイルローって人」

「……ウイルロー……」

途端に厳しい顔になつたキースに、わたしはちょっと驚いた。

「……キース、その人がどうかしたの?」

なんとなく不安になつて尋ねると、キースはわたしの肩を掴んだ。

「ユーキ、ウイルローとなにを話した?」

「え……、わたしの噂のこと話したよ。あの人、なぜかわたしが異世界人だつてこと知つてたけど、なんでなの?」

「……そう、ウイルローが……」

キースが厳しい顔のまま呟くのをわたしは息をのんで見ていた。そんなわたしに気づいたキースは、厳しい表情を崩してちょっと笑つた。

「……ああ、ごめんね。なんでもないんだ」

「……なんでもないって感じじゃなかつたけどな。」

釈然としない思いでキースを見たけど、もつ彼はそのことに触れる気はないようだ。

「君がこんなところにいるつてことは、どうせカディスが君になにか言つたんだろう？ なんなら、まだここにいればいいよ。反省させるためにも、もう少し君を探させるつていうのも悪くないかもね」少しおどけたようにキースが笑つて言つ。わたしもそれにつられて笑つた。

ちょうどその時、庭園に柔らかな風が吹いてきて、さわぐれ立つていたわたしの心も凧いでいく。

ああ、綺麗だな。

揺れる花々を眺めながら、わたしは口を開いた。

「……ねえ、キース」

「うん？」

「変なこと聞くけど、この国の埋葬方法ってなにかな？ 士葬？」

この聞き方は、やつぱり唐突だつたかな。

キースは不思議そうに首を傾げたけど、律儀に答えてくれた。

「一般的にはそうだね。貴族や王族なんかだと、防腐魔法をかけたりするけど

「そりなんだ。日本では火葬なんだよね。……だからわたしの元の体、たぶんもう無い」

キースがわたしの言葉に絶句する。

わたしは彼の視線を避けるように横を向いた。

「なんとなくだけど、分かつちやつたんだ。わたし、元の世界ではもう死んでる。だから、もう元の体には戻れない

「それは……」

「元の体に戻れるか調べてくれるって言つたでしょ？ でも、もう必要ないから調べなくても、いい……よ

なるべく明るく言おうとしたのに、また泣きたくなってしまった。

泣き顔なんか見せたら駄目なのに、わたしの意に反して涙は頬を転がっていく。

「ユーキ」

キースがわたしを見て眉を寄せた。

ほら、キースが困ってる。こんなふうに泣いぢや駄目じゃない。

「ごめ……、わたし……っ」

いたたまれなくて謝つた次の瞬間、わたしはキースに痛いほど抱きしめられていた。

「キー……」

突然のことに驚いて、わたしはキースの名前を呼ぼうとしたけれど。

開きかけた唇をキースの唇に塞がれた。

「…………？」

今されたことが信じられなくて呆然として聞くと、キースはなにかを堪えるように顔をしかめた。

キースは、こんな顔をする人だつたらうか。いつも飄々として掴み所のない人だと思つてたのに。

「…………もう駄目だ。君はカディスのものになるかもしないのに、僕はもう自分の気持ちを偽れない」

わたしがカディスのものになるかもしけないって、なんのこと？
混乱するわたしを抱くキースの腕に力がこもる。

「僕は、君が好きだ」

そう言つた後にまたキースの唇が落とされる。

「え、あの、あの……っ」

ただ狼狽えるだけのわたしの唇に何度もキースが口づける。

キースがわたしを好き？ どうして？

「キー……、や……、ま……っ、て……っ」

口を開こうとする度に唇を塞がれて、息苦しそうに四肢がしそうになる。

抵抗することもできずにくたりと力を失つたわたしの背をキース

の腕が受け止める。

キースは苦しげな顔をすると、わたしを強く抱きしめた。

「ヨーキー、このまま君を」

「なにをやつている！」

怒声が聞こえてきたと思ったら、次にはキースはカディスに殴り倒されていた。

ふらりとその場に倒れそうになつたわたしをリイナさんが支えてくれる。

キースは切れた口の端を拭うと、ゆっくりと立ち上がった。

「我慢できないのは獣だと言つたのは、おまえではなかつたのか」「キースはカディスのその言葉に答えずに、わたしの方を向く。途端にびくりと体が震えた。キースが今までと違う人みみたいに見えて怖かった。

キースはわたしの方に手を広げてなにかを唱える。すると、周囲の景色が一変した。

「どうやら、移動魔法を使われたみたいですわね」

わたしにくつづいていたリイナさんも、一緒に部屋に送られらしい。

「それにしても、キース様には驚きましたわ。あのよつて我を忘れてしまわれるなんて。難攻不落と言われたキース様を陥落されるなんて、さすがイルーシャ様ですわ」

……リイナさん、その「さすがイルーシャ様ですわ」って口癖になつてない？

「そ、そんなこと……。わたし全然お姫様らしくないし、キースがわたしを好きつていつのもなにかの間違いです。わたし、口が悪くて、がさつですし」

「……知つてますわ」

ちょっとうろたえながらさう言つと、リイナさんはいたずらっぽく微笑んだ。

「口が悪くても、がさつでも、イルーシャ様はイルーシャ様ですわ。陛下や、キース様が惹かれたのもそんなイルーシャ様ですもの。イルーシャ様は、今の『自分にもっと自信を持つべきですわ』

「そ、そうかな……」

「二人に好かれてると言つのは、ちょっと自信がない。この容姿だから好きだってことも充分考えられるし。

「そうですね。飾らない今のイルーシャ様はとても魅力的です」「そ、そんなに褒められると、ちょっと照れるんですけど……」

思わず赤くなつた頬を両手で隠す。リイナさんは、そんなわたしにふふ、と笑う。

「ほら、イルーシャ様はとても可愛らしいですわ」
リ、リイナさん……、もう勘弁してください。恥ずかしいです……。

褒められ慣れてないわたしには、既に許容量を越えている。

「それでは、わたくしあ茶を淹れてくれますね。イルーシャ様も一人の男性に告白されていろいろお疲れでしょう。今度こそ、『ゆっくりしていただきないと』

リ、リイナさん、ひょっとして両方とも見てたの？

内心冷や汗をかく思いで聞くと、リイナさんはにこやかに笑つた。

「ええ、もちろんですわ。こんな素晴らしいものを見逃す手はありませんもの」

「これは、恥ずかしすぎる。

ようようと、定位置の長椅子に腰をかけるとわたしは肘掛けにつたりともたれ掛かつた。

いや、とにかくいろいろありすぎた一日だった。

帰れなくなつてしまつたのを哀しんでたばずなのに、それもそれほど哀しくなくなつてきた。

……いや、まだちょっと心が痛いけどね。

でも、どんなに泣いても、わたしはここで生きていくしかないん

だ。だつたら、とにかく、イルーシャとして生きてやる。

イルーシャ様は、イルーシャ様ですわ。

セツキリイナさんが言つた言葉を思い返す。

「うん、そうだね。イルーシャになつても、わたしはわたし。

ただ、姿が原田由希からイルーシャに変わつただけだ。

「イルーシャ様、落ち着かれたようで、よかつたですわ」

お茶を出してくれながら、リイナさんが微笑んだ。

「うん、わたし、決めたの。自分らしく生きることにするって。リ

イナさんのおかげだよ、ありがとう」

おいしいお茶を飲んで、わたしはこつこつ笑つた。

明日、カティスとキースにわたしの決意を報告することにしよう。

「一人からの告白は、正直どうしていいか分からないけど、それはとりあえず、保留と言つておこう。……うん、そうしよう。

決意はしたもの、やつぱり一人に面と向かつて言つのは恥ずかしい。

わたしばぐるぐると巡る思いと戦いながら、花々が咲き乱れる庭園をやつぱりぐるぐると歩いていた。

「……なにをやつてるんだおまえは。変なやつだな」

問題の一人が現れたのに驚いて、わたしは飛び上がってしまった。

「力、カディス、なんで……？」

「窓からおまえがここにいるのが見えたから来てみただけだ。さつきのおまえの行動は端から見たら奇行にしか見えんぞ」

「う

まつたくその通りなので、わたしはなにも言い返せない。

「……なにか悩んでるのか？ 僕とキースのせいか」

「うわああ、カディスの馬鹿、どうしてくれるので、思い出しちゃつたじやないよ！」

カディスに抱きしめられて告白されたこととか、キースにキスされて告白されたこととか。

真っ赤になつた頬を隠すように覆い、その場を駆け出そうとして、わたしははた、と気がついた。

いや、ここで逃げたら駄目なんだ。

「そういうえば、わたしカディスに言つてなかつたことがあるんだ」

「なんだ、昨日の大嫌いという言葉のことについてか

「……ああ、そう言えればそんなこと言つたつけ」

「おまえ……」

わたしのその言葉にカディスの頬が引きつった。いや、すっかり忘れてたよ、ごめん。

「大嫌いって言つたのは、ハツ挡たりだった。ごめん、謝る」

「……ハツ挡たり？」

「カディス、あの時わたしがここに来てくれて良かつたって言つたじゃない。わたしは元の世界にはどうやつても帰れないのが分かつてたから、頭に来てつい言つちゃったんだよ」

「……帰れないのが分かつてたとはどういうことだ」

カディスが不審そうに眉を寄せた。……そういえば、キースには言つたけど、カディスは知らないんだつけ。

「ああ、元の世界ではわたし、もう死んでるから

「な……」

カディスが瞳を見開いて、言葉に詰まる。

「なぜ、それを早く言わない。分かつていたら、あんなことは……」

狼狽するカディスにわたしはちょっと笑つた。

「分かったのはつい昨日のことだつたから……。夢で見たの、わたしの遺体が焼かれるところ。それでわたしがもう死んでるつて確信したの」

「だが、夢で見ただけなら、元の体がなくなつているとは限らないだろう」

「……ううん、それはないよ。うまく言えないので、わたしには分かるんだ」

そう言つて胸元に手を当てる。

あの時の喪失感を説明するのはたぶん難しいと思う。

今でも泣きたくなるような虚脱感と絶望感は忘れられない。

「だからね、たぶん、わたしこのままずっとイルーシャのままなんだ。わたしの元の体はもうないから」

「ユーキ」

カディスの腕が私に延びよつとしたその時、目の間にキースが現れた。

本当にいつも唐突だね、キース。それで助けられていることも何度もあるけど。

「キース、おまえ……」

「ユーキが心配なのは、カディス、君だけじゃないんだよ。僕もだ」

まだ一人とも冷戦中なのかな。
わたしの元の体のことも話してなかつたようだし。

……あ、そうだ。

二人の顔を見て、わたしは当初の決意を思い出した。
「わたし、二人に聞いてもらいたいことがあるんだけど」

「なんだ」「なに？」

ほとんど同時に返事が返つてくる。

うん、大丈夫、ちゃんとと言える。

私は深呼吸を一つして、覚悟を決めた。

「あのね、わたし決めたんだ。これからは原田由希じゃなくて、イルーシャとして生きるつて」

「

一人がなにかを言いかけて沈黙する。

「どうせ、元の体には戻れないし、だつたらこのままイルーシャとして過ごすのも悪くないかなと思つて」

なんと返答しようか考えあぐねているらしく、一人から視線を逸らすようにして、私は横を向く。

「……わたし、元の世界にいたときね」「

まづい、また泣きたくなつてきた。

わたしは溢れてきた涙をこぼさないように顔を上げた。

「本当に適当に生きてたの。適当に高校卒業して、適当にバイトして、適当に友達づきあいして。これからも、そんなふうにして無難に生きていくんだろうなとか漠然と思つてた」

「こう言つと、本当につまんない人生だな。なんかもつとやりようがあつたろうに。」

「でも、そんな生き方しかしてこなかつたこと、自分が死んでるつて分かつてから、すごく後悔した。今までのわたしが生きてきた意味つてなんだつたんだろうって思ったの」

それに、泣いてたお父さんとお母さん。

結局、なにも親孝行できずに死んじゃつたな。

そういうば、一人共わたしの小さい時の写真をケータイの待ち受けにしてたつけ。

愛されていることにも気づかずいたなんて、本当にわたしは親不孝だ。

死んじやつた今でも、一人の待ち受けにわたしが表示されているのかな。……だつたらいいな。

なにも残せなかつた。

それが、今とても哀しい。

もし、なにかに打ち込んでたら。

もし、親友がいたら。

もし、両親の愛情に気づいていたら。

今このこの空虚な気持ちもなにか違つていただろうか。

「わたしがこの世界に来たのはなにか意味があるのかもしないし、もしかしたらないのかもしない。でも、今度はイルーシャとしてちゃんと生きるよ。今度は後悔しないよ!」

この体になつてから、まだいろいろなことに慣れなくて大変だけど、少なくとも適當なだけの人生になるようなことはないだろうな。そう考へると、お姫様として生活するのも悪くない気がしてきた。

「……あのね、わたしのこと今度からコーリーじゃなくてイルーシャつて呼んで」

「……おまえは、それでいいのか?」

「うん、いいよ。それに、イルーシャつうことになつてゐるのに、コーキつて呼ばれてたら都合が悪いでしょ?」

「それはそうだが……」

「あ、あと、わたしががさつで口が悪いつてもう周りの人にはれてるみたいだから、もう猫被らなくていいよね。公の場ではちゃんとお姫様やるつもりでいるけど」

「うん、それでいいと思うよ。君はそのままの方が魅力的だし」「キース、どやぐさに紛れて口説くな。……俺もそれには異論はないがな」

キースを牽制しつつ、カティスが偉そつと同意した。

「よかつた……。ありがとう」「う

そのままの自分で振る舞うのを反対されるのが一番の心配だったから、正直ほつとした。

「別に礼を言われることでもない」

「それでも、ありがとう。嬉しい」

結構無茶な要求かなって思つてたから、認めてくれて本当によかつた。そう思つて微笑む。

落ち着いてくると、庭園に田をやる余裕ができた。
咲き乱れる花々。風に舞う花びら。

なんて綺麗なんだろう。

この世界でわたしはもう一度生きるんだ。

そのために、今やらなければいけないことがある。

「ね、早速だけど、わたしの名前呼んでみて」

「ユ……イルーシャ」

「……イルーシャ」

うん、わたしはイルーシャ。

わたしは一人に向き合つて微笑んだ。

これは原田由希に決別して、イルーシャとして生きていくための儀式だ。

消えゆくもう一人のわたしを思つて、涙が自然と頬を伝つていく。

「……もう一度呼んで」

「イルーシャ」「イルーシャ」

二人の優しい声に涙を堪えられなくて、わたしは顔を覆う。

「……うん」

これでもう、わたしは原田由希じゃない。わたしはイルーシャだ。
けど、わたしの本質は変わらないから、それでいいよね。
そう思うのに、涙が止まらないのはなぜだろう。

風が優しく吹いてわたしの髪をそっと揺らしていく。
二人がまたわたしの名前を呼ぶ。

「うん」

イルーシャはわたし、わたしはイルーシャ。

この世界でわたしは新しい生を刻む。
そして、今度こそ後悔しないように生きていくから。

10 カディイスからの求婚

「いい香りー」

芳香を放つている花に顔を寄せてわたしはその香りを楽しむ。

最近のわたしのお気に入りは庭園。

散策しながら花を楽しむのが朝の日課になっている。

「イルー・シャ」

「あれ、カディイス、おはよう。執務はどうしたの?」

「……無粋なことを言うな。せつかくおまえに会いに来たのに」

「……イザトさんに怒られても知らないよ」

イザトさんの名前を出したら、カディイスがちょっとと動搖した。

そうか、カディイスもイザトさんが苦手なのか。イザトさん、見る
からに厳しそうだもんね。

「それはそうと、おまえに伝えたいことがあるんだが」「
なに?」

首を傾げる私の髪をカディイスの大きな手が梳ぐ。

「イルー・シャ、俺はおまえが好きだ。俺の妃になつてほしい」

「え……」

わたしは瞳を見開いてカディイスの真剣な顔を見返す。

「俺にはおまえ以外の女を妃に据えるなど考えられない。……考
えておいてくれ」

「そ、そんな……」

カディイスの突然のプロポーズにわたしは狼狽えるしかない。

「そんなこと突然言われて……、困る」

「困る? どうしてだ、おまえは俺が嫌いか?」

カディイスの真摯な視線を受けて、わたしは顔に血が上るのを感じ
た。

「き、嫌いじゃないけど……」

そりや、出会った当初は大嫌いだったけど、今はなんだかんだ言

つてお世話になつてゐるし、カディスには感謝してゐる。でも好きかと聞かれたら、よく分からない。

わたしはどうしていいか分からなくて視線をあちこちに彷徨わせる。すると、あるものに目が行つた。

「あ、あれ、ひょつとしてつ。

「お、おいつ！？」

いきなりその場からダッシュしたわたしに驚いたらしいカディスが声をあげる。

目的のものの側に駆け寄つたわたしはあちこちそれを観察する。幹の色や花の形、花の付き方といふこれは。

「……やっぱり桜だあ……」

感激して、思わず幹に抱きつく。

「エーメの樹じゃないか」

わたしを追つてきたカディスが樹を見上げて言つ。

「こっちではエーメって言うの？ 桜がこっちにあるなんて思わなかつたから嬉しいな」

「……抱きつくほどその花が好きなのか？ デウセ抱きつくなら俺にしてほしいが」

「うん、大好き！」

につり笑つて言つたら、なぜかカディスが目元を赤く染めた。いや、大好きなのは桜のことであつて、カディスのことを言つたわけじゃないよ。

「そ、そうか。そんなにエーメが好きならもつと庭園に植えさせるが」

「うーん、庭園も悪くないけど、桜並木の方がいいなあ」

「並木道か。そう言えば、師団への道が殺風景だつたな。早速植えさせるとか」

「本当！？ 楽しみー。日本ではね、夜になると照明付けて夜桜見物とかしたんだ。あれは綺麗だったなあ

わたしがうつとりとその時の情景を思い返す。

「そうか、それはいいな。夜に花を観賞するか、なんとも趣がある
催しなな」

「でしょう?」「

実態は飲んで騒ぐのが目的な人も多いんだけどね。まあ、それを
言つたら口無しなのでやめておく。

「……ところで俺の妃の件だがな
わ、忘れてなかつたんだね……。

内心冷や汗をかきながらガディスに向き合つと、わたしは彼に抱
き寄せられた。

「力、ガディス……」

その腕から逃げ出したかつたけど、思いのほか強い力で閉じ込め
られていて、それは叶わなかつた。

「は、離して……」

わたしは真つ赤になつて身を捩る。

「断る、と言つたらどうする?」

「い、困るよ。どうしてこんなことするの?」

「おまえは先程の俺の言葉を聞いていなかつたのか? 俺はおまえ
が好きだと言つただう?」

き、聞いてたけど、でもつ。

ガディスは右手を挙げてわたしの頬に触れた。親指でそつと唇を
なぞられてわたしはびくりとする。

「イルーシャ、怖がるな」

ガディスが苦笑したけど、わたしは首を横に振るしかできなかつ
た。

「む、無理だから……つ」

正直、ガディスに支えられてなかつたらこのまま倒れそう。

「……仕方ないな

そう言つと、ガディスはわたしの額にキスをした。

「本当は唇に口づけたいところだがな」

その言葉で、わたしは耳まで赤くなつて抗議する。

「駄目駄目、絶対駄目！」

「……キースには許したじゃないか」

「あ、あれは、不可抗力で……っ」

「なるほど、不可抗力か」

あれ、なんか微妙にカディスの目が据わってる。え、え、なんか顔が近づいて来てるような気がするんだけど！

「カディ……ッ」

仰け反ろうとしたら、頭の後ろに手を添えられてわたしは動けなくなる。

おもむろにカディスは顔を傾けると、わたしに口づけた。

「や……っ」

一度目は軽く、二度目は長い長いキス。

もう駄目、酸欠になりそ。

くたつと力の抜けたわたしを支えながら、カディスが苦笑した。「息をしないやつがあるか」

いや、頭では分かつてゐるんだけどね……。

わたしは肩で息をしながら、カディスに寄りかかる。そんな状況の中でカディスは楽しそうにわたしの髪を撫でていた。

「おまえの言い分からしたら、これも不可抗力だな」

「…………あのねえ……」

なんというか、どつと疲れた気分だ。

「恋人でもないのに、そんな簡単にキスしたりしないでよ」「だから、俺の妃になれと言つている」

どこまで俺様なんだ、カディス。

「わたしは承諾してないでしょ。……とにかく離して」

そうは言つたものの、脚に力が入らなくてフラフラしていたら、カディスに抱き上げられた。

「これはいわゆるお姫様抱っこー！」

「ちょっとカディス、わたし歩けるからつ。降ろしてー。」

「説得力がないぞ。まともに歩けないだろ？」

う……つ、そななんだけど、さつきから晒されている好奇の視線
が気になつて仕方ない。

「だつて、恥ずかしい……」

わたしは赤くなつた頬を両手で隠した。

「おまえは時々、すごく可愛いな」

「わ、わたしが可愛いとか、ありえないからつ」
カディスの言葉に本氣でびっくりして言い返す。わたしはむしろ
可愛くない性格だと自負している。

「褒めたんだ、素直に受け取れ」

「え、と。う、うん……」

なんとか頷いたものの、わたしは恥ずかしさから真つ赤な顔で
俯くしかなかつた。

「そんな顔を他の男に見せるな。特にキースには」

「え、なんで？」

カディスがなんでそんなことを言つてくるのか分からなくて、顔
を上げて聞く。

「それは、やつが獸だからだ」

……カディスつてば、以前、キースに獸と一緒に言われたのを
気にしてたんだ。

「……それはカディスもじやない」

「俺はいいんだ」

「いや、良くないから!」

ここで強く言つておかないと、被害がまたわたしに及ぶ。
むうと睨むと、カディスは仕方なさそうに溜息をついた。

「……一応自重はする」

そんなやりとりがあつたのが十日程前。わたしは再び庭園の散策
に出ていた。

「イルーシャ様、おはよー」

「おはよー」

ヒューとブラッドにぱたり出合つて、朝の挨拶を交わす。

「イルーシャ様、師団への並木道のこと、ありがとうございました」「陛下がおっしゃつてましたよ。トーメの樹を植えることを提案されたのは、イルーシャ様だと」

「え、あれ、もう完成したの？　それを言つたのは、十日くらい前なんだけど」

「ちょっと卑くない？　あまりの仕事の速さに驚いてると、ヒューが言つた。」

「ええ、我々騎士団も出での急のことでしたが、おかげで素晴らしい出来映えで……」

「騎士団まで出張したの？　なんか、悪いことしちゃつたみたい」わたしの一言でそんな大事になつていたとは知らなかつた。今後は発言に気をつけなくちゃ。

「いえいえ、そんなことはたいしたことではないですよ。イルーシャ様のおかげで殺伐とした我々の宿舎にも潤いが出来たといつものです」

反省するわたしに、ブラッドが微笑んだ。

「そう言つてくれるなら、嬉しいけど……」

わたしは一人に師団への並木道まで案内して貰つた。そこでわたしが目にしたものば。

「な……っ、なにこれ」

「見事なものでしょ？　ちょっとした名所になりますね、これはヒューが感嘆したように溜息をついた。

確かに見事だ。でもわたしはカティスにここまでしてとは言わなかつた。

満開の桜並木……、はまいいとしてその樹の大きさ！

背の高いブラッドやヒューの身長を軽く超す樹の高さ。幹も何年も年月を重ねたらしく立派だ。

「一、これ、どうやって運んだの？」

「それは魔術師団が移動魔法で運んだんです。ちょっと壯觀でしたよ」

……この大きさの桜の樹を何百本と運ぶんだもの、それはそうだうつね。

思わず引きつった笑いを浮かべていると、一人が心配そうに声をかけてきた。

「イルーシャ様？」

「もしかして、お気に召さなかつたのですか？」

いや、桜並木はとっても綺麗で気に入つたけど。

「……カディスがここまでやるとは思わなかつたのよ。せいぜい、道沿いに桜の苗木を植える程度だと思つてたし。これ、いつたいくらかかつてるのよ」

この桜の樹一本だつて相当の値段のはずだ。

「イルーシャ様、陛下からの贈り物の値を聞くなんて野暮というものですよ」

「いや、だつてこれ、国民の税金でしょ？ わたし嫌だからね、『あの女のせいで国庫を圧迫した』なんて言われたら…」

わたしがそう捲し立てる、ブラッドは目を白黒させた。

「そ、そういうことですか……」

「イルーシャ様、しつかりされますね……」

ヒューはぽかんと口を開けていたけど、しばらくしてから妙に感心したような口調で呟いた。

「ちょっとカディスに抗議していくわ」
「まあまあ、せっかくここへ来たんですから、師団舎まで案内しますよ」

身を翻して駆け出しそうになつたわたしをブランチが引き留めた。
「あ……、うん。そうだね、せっかくだからそういうかな」
「エーメの並木道をじ覽になつて行かれると良いですよ」

「うん」

カディスに文句の一つも言いたいところだけれど、植えてしまつたものはしようがないものね。ここは一人の言葉通りにしよう。わたし達三人は桜の花びらが舞う並木道をゆっくりと歩いて行く。カディスにはびっくりさせられたけど、桜は本当に綺麗で自然に微笑んでしまう。

「……なんとも幻想的ですね」

「うん、そうだね」

ヒューの言葉に頷くと、彼は首を横に振つてそれを否定した。

「……イルーシャ様がですよ」

「え？」

「エーメの花がとてもお似合いになるのですね。陛下がイルーシャ様を溺愛されるのも良く分かります」

「え……」

そんなことを言われるとは思つてもいなかつたわたしは、かあつと赤くなる。

「溺愛つて……、そんなことないよ」

「この植えられたエーメを見て、そんなことを言われるんですか」
た、確かにこれは常軌を逸してると思つけど。

「そ、それはわたしがこの姿だからだよ。たぶん、カディスがわたしを好きだつて言うのも氣のせいだと思つな」

「……陛下があなたに好きだと叫ばれたのですね？」

「あ」

しまった、言わなくてもいいことまで言つちやつた。わたしは慌てて口を塞いだけでもう遅かった。

「そして、王妃にと望まれていると」

ヒューの言葉を引き取つて、ブライアンが言つ。

「な、なんで知つてるの？」

ここまで来るとわたしはうろたえるしかない。

「陛下が俺達を集めた席でイルーシャ様を妃にしたい、本人にも求婚したとおっしゃつてましたよ」

「ええつ、嘘つ」

みんなの前でそんなこと公言されるなんて恥ずかしきる。わたしは真つ赤になつて頬を押された。

「……あれは俺達に対する牽制でもあるんでしょう。特にキース様への」

「え……なんでキースが出て来るの」

そもそもヒュー達への牽制つてなんだ。

「陛下とキース様があなたをめぐつての恋敵同士であるところ」とは有名ですよ

「う、嘘……」

なんでもそんなことが有名になつてるわけ？

「なんでも庭園で殴り合いをしたとか。俺もそれを聞いたときは自分の耳を疑いましたよ。あのキース様が陛下を殴つたんですよ」

今でも信じられないと言つよつにヒューが首を横に振る。

「えええつ、キースが！？」

そんなこと初めて聞いたよ。

あの掴み所のないキースがカティスを殴つたなんて。

「あの時そななことがあつたなんて……」

「あの時？」

「ううん、なんでもないつ。こへらキースでも、カティス殴つて大

丈夫なの？」

「確かに一日間の謹慎処分になられていたはずですよ。その後なぜか五日に延びてましたが」

わたしがイルーシャとして生きていいくと決意表明したとき、キースは既に謹慎処分中だったのか。ひょっとして謹慎期間が延びたのわたしのせい？　ああ、なんか罪悪感が……。

「殴り合いでをするなんて余程のことですよ。なにかあつたんですか？」

「無粋なことを聞くより、ヒュー。色恋のことに決まりてんじやないか。たとえば口づけとか」

唇をなぞるブラッドの視線をたどりてヒューがわたしを見る。

「　　」

言に当たられたわたしはただただ真っ赤になるしかない。恥ずかしきて涙までにじんできた。

「そんな可愛い顔をされると、陛下でなくともべらつきますね、イルーシャ様」

「ブラッド、からかわないでよね」

「からかつてなんかいませんよ。イルーシャ様はとても可愛らしいです」

まだ言つかつ。それならこうだ！

わたしはブラッドの両頬を摘んで引っ張ると、ハンサムな顔が聞抜けになつた。……ちょっと笑えるかもしれない。

「……なにしてるんですか、イルーシャ様」

痛むらしい両頬を押されてブラッドが言つ。

「ブラッドがふざけるからよ。誰にでもそういうこといつのやめですよね」

「なにか誤解があるようですが、誰にでもいつのやめではありませんよ」

「……どうだか」

「」の間、よく知りもしないわたしに對して色皿を使つたのはまだ

忘れないぞ。

わたしはブラッドに冷ややかな視線を浴びせる。

「陛下がイルーシャ様が時々妙な行動に出るとおっしゃつてました
が、直に身に受けることができて光榮ですよ」

「妙な行動つて……」

「それは、つまり奇行つてこと?」

ひくりとわたしの頬が引きつる。

カディス、わたしのことそう思つてたんだね。そんな女に告白するつてどういうこと?

それにブラッド、その反応はおかしくない? なんでそんなに嬉しそうなんだ。

「……ブラッド、イルーシャ様に対して言葉が過ぎるわ」

ヒュー、もつと言つてやつて!

「しかし、イルーシャ様は大変魅力的な方だ。これには同意するだろ? ヒュー」

「……まあ、それはそうだな」

えええ、ヒューまで! これつてなんのほめ殺しよ。

「そういえば、陛下とキース様がイルーシャ様の異世界での知識はすごいと褒められてましたよ」

ふと思いついたようにヒューが言つ。

「え……、別にすぐなんかないよ。わたし中途半端な知識しかないもの」

そんなことヒュー達に話してたんだ。居心地悪すぎて、なんだか背中のあたりがムズムズする。

役に立ちそうな専門的な知識もないし、二人共わたしを買いかぶりすぎだよ。

「でも、陛下は消費税を導入して、教育を義務化することを検討されてますよ? それはイルーシャ様の意見だそうですが」

「……ああ、そういえばそんなことを言つたかも」

晩餐の席でカディスとキースにいろいろ聞かれた時言つたつけ。

でもいきなり課税されたら国民の反発もあるだろ？から難しいかもってカティスには言つたはずだけど。

「国庫を心配したりする姫もイルーシャ様以外いませんね」

「いや、あれは単にわたしが悪く言わるのが嫌だったからで、そんな意図で言つたわけじゃないよ。……」

ヒューに褒められるようなことはなにも言つてないぞ。わたしとしては、むしろ計算高い言葉じゃないかと思つ。

「国民の税金なんて発想は普通の姫にはありませんよ。それだけで必ず」
「じいです」

「いや、税金納めてる庶民だつたらそういう発想すると思うよ。日本ではわたし一応働いてたし」

「しかし、人間贅沢には慣れるものですよ。それなのに変わらずにいられるところが、イルーシャ様のすごさどころです」

「も、もうやめてよ。そんなに褒められると恥ずかしくてしちゃうがないよ」

真っ赤な顔の前で慌てて手を振るわたし。

「やはり、イルーシャ様は可愛らしいですね。ちょっととした仕草とか、褒められると赤くなれるところとか」

「も、もういいよ。師団舎案内してくれるんでしょう？　早く行こうよ」

これ以上聞いていられなくて慌てて駆け出すわたしの後ろから、くすくすと一人の笑い声がした。

「イルーシャ様、手前右側が紅薔薇、左が白百合、奥右側が近衛、左側が魔術師団になります」

二人に案内されて師団舎に着くと、ざつと説明してもらつた。三階建ての建物がそれぞれ道を挟んで並んでいる。四つともとても似ている建物なので説明してもらつてよかつた。

ちなみに魔術師団は女性もいるけど、他の団は男性しかいないんだとか。

「ふうん、そうなんだ。女人の人でも入れるといいのにね」

「まあ、男の中に女性を入れるといろいろ問題も出てきますからね……そういうものなのか。女人の人人が男社会に進出するつて難しいんだな。

そんなことを考えながら、紅薔薇騎士団の師団舎に入る。ちょうど訓練中のように、かなりの人数の騎士さん達が剣を振っていた。

「イルーシャ様だ……」

「ほ、本物……」

いきなり注目を浴びて、わたしは焦つて一人を見る。

「大丈夫ですよ。とつて食いやしません。……たぶん」
ブラッド、……たぶんってなんだ。

「絵姿より綺麗だなあ」「だな」

そんな咳き声が耳に入つてきて、わたしは首を傾げる。

「絵姿ってなんのこと?」

「王宮でイルーシャ様の絵姿を発行してゐんですよ。これが発行するとすぐ売り切れる人気で……知らなかつたんですか?」

「うん、知らなかつた。カディスつてば、なんで教えてくれなかつたんだろ」

「憶測ですが、愛している女性の絵姿を他の男が持つてることを知らせたくないかつたんじやないですか?」

「愛し……」

かあつと赤くなつた途端、周りがもつと騒がしくなつた。

「おおつ、赤くなつたぞ。可愛いなあ」

「団長、イルーシャ様を口説いてるんですか

「おまえら、うるさいぞ」

ブラッドがそう言つても騒ぎは収まらない。

ブラッドは溜息をつくと、わたしに向き合つた。

「イルーシャ様、彼らになにか声をかけてくれると助かります」

そう言われても……、いつたいなにを話せと？ まあ、日頃練習

しているお姫様スマイルを披露するチャンスだと思えばいいか。

渋々騎士さんの集団に近寄つていって、おもむろにわたしは口を開いた。

「皆さんおはよーいぞこます。あの……鍛錬頑張つてくださいね」
につこり微笑んでそいつ言つと、うおおおおお、といつ雄叫びが響いてびっくりした。

「イルーシャ様！ 僕、頑張ります！」

「お、俺も！」

「俺も頑張ります！」

「……なにかすごいですね……」

ヒューが突然としたように呴いたけど、それにはわたしも同意だ。
「動機が不純でも、やる気を出してくれるのはいいことですよ。」

「……イルーシャ様、これからも是非こちらにいらしてください」

「動機が不純つて……、つまりわたしはアイドル状態つてこと？」

につこり笑うブラッドと俄然はつきつて剣を振る騎士さん達をわたくしはそれぞれ見やる。

「……分かつた。そうする」

ブラッドも結構黒いかもしないなと思いながらわたしは頷いた。

12 鎧函舎訪問と予想外の出来事

「あいつら、後で鍛え直す」

ヒューが憤ったように拳を握つて言つ。

あの後、白百合騎士団にも行つたけど、わたしに對して紅薔薇と大体同じような反応だったのが団長としてショックだつたようだ。「ヒューの地の言葉つて結構荒いよね。だったら、もうちょっと砕けた言葉で話してくれてもいいのに。……それで出来れば友達になつてほしいな」

「……無理ですよ。立場というものがありますから、そういうわけには参りません」

予想はしてたけど、つれない返事が返つてきてわたしは肩を落とす。

「立場があ。結構面倒だよね、それ。わたしに普通に話してくれるの、カディスとキースくらいだし。アイリン姫とは仲良くなれそうだつたけど、姫、忙しくなつちゃつて会えないし」

なんでも、幼なじみとの婚約式の準備で忙しいんだとか。

地を出して話しかけた時にはびっくりしてたけど、そちらの方が魅力的ですつて笑つて言ってくれてたのにな、姫。

「陛下やキース様と同等に話すわけには参りません。……アイリン姫は時期が来ればまたお会いできますよ」

「…………うん」

イルーシャとして生きるつてことは、王族として生きるつていうことなんだよね。

それなりの覚悟はしてたはずだけど、普通に話してくれる人が少ないのは、やっぱりちょっと寂しい。

「あ、でも近衛に親しくなれそうな子はいるんだ。マーティンっていつの」

「ああ、マーティンですか」

ブランドが納得したように頷いた。

「あ、やつぱり知ってるんだ？」

「彼は若いですけれど、有名ですよ。近衛団の団長と侍女長の息子ですからね。それでいて、気さくで飾らない人柄で実力も兼ね備えていますから、人望もありますし。将来、団長になることを約束されたような人物ですよ」

「へえ、マーティンって、そんなすごかつたんだ」

感心しながら、一人と近衛の師団舎へと脚を進める。

近衛団は、紅薔薇や白百合騎士団よりは落ち着いた感じの人が多いみたい。ダリルさん達に挨拶したら、じく穏やかな返事が返ってきた。

「さすがに近衛は違いますね」

「まあ、陛下や王族お付きの師団と我々を比べること自体が間違つてると思つぞ」

ヒューがちょっと悔しそうにして言ったのをブランドがフォローした。

「近衛ってヒリート集団なんだね」

そんなところにマーティンいるんだ。すごいなあ。……ところで、

彼はどこにいるんだり？

舎内を見回していると、ひょうひょうマーティンがこちらに向かってくるところだつた。

「あ、マーく……じゃなかつた、マーティン、おはよう」

危ない、危ない。ついマー君と呼んじやうところだつたよ。前にうつかりそう呼んじやつたことがあって、怒られたんだよね。

「イルーシャ様、おはようございます。……ところで、今なにか変なことを言ひかけませんでした？」

「え？ 気のせいじゃない？」

わたしはそらつとぼけた。……ちょっとじらじらしかつたかも。

「……イルーシャ様、マーティンと仲いいですね」

ヒューがちよつと硬い表情で言つた。……あれ、どうしたんだろう？

「うん、リイナさんはお世話になつてゐるから普通に親近感わくよ。マーク、話しやすいしね。弟がいたらこんな感じかなあつて思うんだ」

「弟ですか」

なぜかおかしそうにしてブラッドが口元に手をやる。

「一つしか違わないじゃないですか」

うーん、弟は気に入らないか。

「分かつたよ、弟扱いはしないから。じゃ、友達つてことドビうかな？」

「……イルーシャ様、ご自分が王族つてこと忘れてますね？ 一介の騎士が王族の方と友人になるなど恐れ多いです」

ええ、マークまでこんなこと言つんだ？

「でも、マーク、一応エリートじゃない。友達になつても問題ないよ」

「一応は余計です。……そのようなこと陛下がお許しになりませんよ」

「なにそれ。いくらカーディスでもわたしの交友関係にまで口出しきたりしないでしょ」

「ご友人が女性でしたら問題ないと思いますよ」

つまり、男性は問題ありだと？ なんでよ。

証然としない思いで、わたしはマークを見返す。

「イルーシャ様、ご自分が陛下の想い人だということを自覚されでください。そんな方と親しくさせて頂くわけにはいきませんよ」

「……そんなこと言われても、わたしはカーディスのものじゃないよ。カーディスがわたしの友達のことまであれこれ言つ権利はないでしょ」

カーディスにはお世話になつてゐるけど、そこまで干渉されたくない。

「じゃあ、わたしカーディスに友達は自分で選ばせてくれつて直談判するよ」

「やめてくださいよ。俺が陛下に睨まれるじゃないですか」

本気で切実そうにマークが訴えた。

え、駄目？

「なら、『許可してくれなかつたら、嫌いになるから』って言ひよ。

これで文句言つてきいたら本当に嫌いになるかもだけど」

「なるほど、それなら陛下も文句は言えませんね」

おかしそうにブラッドが笑つた。

「……そういう問題じやないような気がするんですが」「ちょっと疲れたようにマーティンが言ひ。

「……立場があるので口調までは変えられませんよ?」「これって、了承つてことだよね?」

「うん、わかつた。マーティン、ありがと」

嬉しくなつて笑つたら、マーティンもちよつと笑つてくれた。
「ブラッドやヒューもこれを機にわたしの友達になつてくれると嬉しいな」

「そうですね。陛下の許可が下りましたら、問題ないですよ」
ブラッドは笑つて頷いてくれたけど、ヒューは黙つたままだ。さつきも拒否されちゃつたし、やつぱり無理なのかな。

「……ヒューはどうかな?」

内心の不安を隠しながら聞くと、ヒューは溜息をついて首を横に振つた。

駄目だつたかと思つてしまふばかりしかけたけど、次にはヒューが花のように笑つて言つた。

「……イルーシャ様には、本当に負けますね」

わたしは浮かれながら魔術師団の宿舎までの道を歩いていた。

桜並木は綺麗だし、友達も出来そうだし、正直スキップしたい気分だ。

桜並木の件ではカディスに文句言つてやるつと思つてたけど、それは必要最低限に抑えとこう、とわたしは心に決める。

「イルーシャ、よく来てくれたね」

キースが入り口で出迎えてくれたので、ヒューとブラッドはお役ご免と言つことでそれぞれの宿舎に帰つていった。

キースに案内されて、師団の人達に挨拶する。ここの人達も近衛の時のように反応が穏やかだ。

「ここは師団で唯一、文官と武官が一緒にいるからね。そのせいもあると思うよ。……それはそうと、そんなに熱烈な歓迎を受けたのかい？」

「それはもう、挨拶しただけで叫ばれたんだもの、びっくりしたよ」わたしがそう言うと、キースは前髪を搔き上げて苦笑した。

「……猛獸の群れに鬼を放り込むようなものだね。今日はブラッドレイとヒューアイがついてたみたいだけど、師団を訪れるときは近衛か、傍にいれば僕を連れて行くといいよ」

「え……、近衛の人はともかく、キース忙しいでしょ。悪いよ」

「遠慮しないでいいよ。それに僕は君の傍に出来るだけいたいんだからね」

「え、あの……。あ、ありがとう」

「どう反応していいか分からなくて、赤面しながらなんとかお礼を言つ。」

「どういたしまして。今お茶出すから、座つて」

キースに促されてわたしは応接セットの椅子に腰掛けた。出されたお茶を飲んで一息つく。

「あ、そういうえばキース、カディスと殴り合つて本当なの？」

「ああ、聞いたんだ。本當だよ。僕はカディスを殴つた」

「ど、どうして……？　あなたがそんなことするとは思わなくて、聞いたときはびっくりしたよ。もしかしなくても、わたしのせい、だよね？」

「あの後、カディスが君を無理矢理にでも王妃にするつて言つから、ついかつとなつたつていうのが真相だよ。あの時のカディスもどうかしてたけどね」

「カディスが、そんなこと……。酷いよ、わたしの意思はどうでもいいわけ？」

わたしへの求婚をわたし以外の人に知らせたこともそうだ。カディスは勝手すぎるよ。

「イルー・シャ、カディスは焦つてるんだよ。君がいつ誰かに泣かれてしまわないかとね。……僕もそうだ」

なんで一人が好きなのがわたしなんだろう。

わたしは膝の上でぎゅっとドレスを握りしめる。

「わたし……、そういうのよく分からない。本当にひとつ、あなたやカディスがわたしを好きって言つのもわたしがこの姿だからだと思つてる」

「イルー・シャ」

キースはわたしの隣に腰掛けると、わたしの手にその手を重ねた。

「君じゃない君なんて、僕は興味ないよ。僕が好きになつたのは、ときどき思いもよらないことして、口が悪くて、強いのに弱くて、恥ずかしがり屋の君だ。……これはたぶんカディスもそうだよ」

「わたし、そこまで好かれるような可愛い性格でもないよ」

「それは君が気付いてないだけだよ。君はとても可愛いし、魅力的だ」

キースの手がゆつくりとわたしの髪を梳ぐ。

わたしは動けずに、ただキースの顔をみつめていた。

「君を愛してる。……僕の妻になつてほしい」

13 友達選びでカーティスと対決

「え……と……、わたし……」

なんて、答えたらいいんだろう。

キースにまでプロポーズされると思つてなかつたわたしは、真つ赤になつてうろたえていた。

「わ、わたし、キースのこと嫌いじゃないけど、結婚とかそんなことを考えられない」

「……嫌いじゃないけど、好きでもないってこと?」

「友達としては好きだよ。それじゃ駄目なの?」

「僕はそんなことを望んでるわけじゃない。君の特別になりたいんだ」

「わ、わたし、わたし……」

いつたい、なんて言つたらいいんだろう。軽く混乱していたら、キースに腕をとられた。そのまま彼に抱き寄せられる。

「キース……ツ」

キースがわたしの頤をそつと持ち上げる。

「……このまま君を閉じこめてしまいたいよ。誰にも見せずに、ずっと僕だけのものにしてしまいたい」

キースの瞳の中に狂おしいほどの熱情を見た気がして、わたしはびくりと体を震わす。

「イルーシャ、怖がらないで」

そんなの無理だよ。だつて、いつものキースはこんなこと言わないじゃない。今日のキースはまるで別人みたいに見えて、体の震えが止まらない。

「……キース、お願ひだから離して」

やつとの思いでそう訴えると、キースの腕が緩んだ。

「『ごめん。わたし、もう自分の部屋に戻りたい』

わたし、いうことに耐性なさずさ。自分の経験のなさを嘆い

ても今更しようがないけど。

「……まいっただ。そんなに怖がらせるつもりはなかつたんだけど……。君の部屋に送ればいいんだね？」

「……うん、ごめんね」

キースの移動魔法で自分の部屋に戻つたわたしは真つ直ぐに寝室に駆け込んだ。

ぼすんと音を立てて、ベッドにうつぶせに沈むと、こみ上げてくる恥ずかしさに身悶えた。

わたしは恋がどういうものか知らない。

それなのに一人がわたしにプロポーズしていくなんて、どうしていいか分からぬよ。

日本にいた頃は二十代後半くらいで結婚できたらいいなと漠然と思つてたけど、相手がいたわけでもないし、身近な男の人つていたら、お父さんかバイト先の人達くらいだつた。

年齢イコール彼氏いない歴のわたしには、二人からの告白は正直重い。

それなのに、恋愛を通り越して突然結婚してくれなんて一人とも飛躍しそぎだよ。

衝動のままに、手足をばたつかせて暴れていたら、ちょっと落ち着いてきた。

「……二人とも本当にどうかしてるよ……」

わたしはベッドから身を起こすと、溜息をつく。

キースの言葉によると、わたしの性格含めて二人はわたしのことが好きらしい。

今まで好かれているのを容姿のせいにして逃げてきたけど、いい加減わたしも覚悟を決めて認めなきやいけないのかもしねない。

「……あ、そうだ」

わたし、カディスに言いたいことがあつたんだつて。忘れないうちにカディスのところに行つてこなきや。

カディスと二人きりになるのは気まずいから、できれば執務室に

イザトさんがいてくれるといいなあ。

「よく来たな、イルーシャ」

カディイスの執務室を訪れると、最初に会つた時の態度とは雲泥の差の対応をされた。

あの頃はカディイス、すごく意地悪だったんだよね。それが、今はこの歓迎ぶりなんだもの。人って変わるものなんだな。

……カディイスの場合、変わりすぎつて感じだけど。

お茶を出されてカディイスと向き合つと、わたしは部屋の中を見回した。

「……イザトさんはいないの？」

「……なんだ、イザトに用だつたのか？」

カディイスが、心なしがつかりしたような顔になる。

「ううん、そうじやないけど」

「？ おかしなやつだな」

わたしの心労も知らずにカディイスが不思議そうな顔をする。

「今日は、カディイスにいくつか話があつて來たんだ。……時間いいかな？」

「ああ、大丈夫だ。いくらでも時間を空けるぞ」

「……いや、あまり空けられても困るんだけどね……。カディイスも仕事あるでしょ？」

「まあ、それはそうだが……」

「なんだか歯切れが悪い。……これは仕事がたまつてゐるんだな。

「俺も、おまえに話さなければいけないことがあるんだが」

「なに？」

「例のおまえの披露の日取りが決まった。一月後だ」

「そつが、とうとう決ましたんだね」

「おまえの礼儀作法も様になつてきたし、そろそろ頃合いかと思つてな。周りからももつたいぶるなど突かれているしな」

カディイスによると、バルコニーで国民に顔見せしてから、馬車で

市内をパレード、夜には舞踏会というスケジュールなんだそつだ。

「……なんか、忙しくない？」

「ああ、忙しいぞ。おまえは特に色々準備もあるはずだしな」

「うわあ……。お姫様やるのも楽しじゃないねえ……」

殺人的スケジュールに早くも挫けそうなわたし。

「俺も側にいるから心配するな。辛いようなら言え。息抜きさせる時間くらいは作る」

「……ありがとう、カディス」

いつも不器用なカディスの心遣いが嬉しくて、わたしは微笑む。

「無理させておまえに倒れられでは困るからな」

カディスが腕を上げてわたしの髪を撫でる。その顔は優しくて、カディスの好意が伝わってきた。

わたしはカディスの気持ちに応えられないことが心苦しくて、彼からそっと視線を逸らす。

「あ、そうだ。桜並木の件なんだけど」

「ああ、見たのか。どうだ、見事なものだつたろ？」「…」

「いや……、見事は見事なんだけどね……」

「なんだ、気に入らなかつたのか？」

不満そうにカディスがわたしを見る。

「……桜はとっても綺麗で気に入つたよ。でも、あそこまではやられると思つてなかつたから、びっくりしたんだけど」

「……やりすぎたか？」

「それはもう。あんな立派な樹じゃなくて、苗木で良かつたんだよ。あれ、いつたいいくらかかつてるの？ わたしの言つたことで国民の税金がたくさん使われてるかと思うと申し訳ないよ」

「そつだつたのか、おまえが喜ぶかと思つてついやつてしまつたが

「……」

「ついつー!?」

そんな気軽にあんなことやらぬでほしい。

「い、いや、悪かった。俺が考えなしだつた。……それはそつと、

イルーシャ、おまえ国民の税金のことまで考えてるのか

「だつて、わたし中身は庶民だもの。どうしたって気になるよ」

「そう言つと、カディイスは感心したような顔をした。

「おまえはす”いな。贅沢にも慣れず、国民のことを考えられる。

……やはり、おまえを選んだのは正解だつたな」

「え……、えつと……」

カディイスが手放しで褒めるので、わたしは赤くなるしかない。

「だから、あの、気持ちはありがたかったけど、わたしの為にあまりお金使わないでほしいな」

「おまえは本当に欲がないな」

カディイスが仕方なさそうに溜息をつく。

「それで、わたしの絵姿発行してるつて聞いたんだけど、その売上を桜並木にかかった費用に充てられないかな？」

「……聞いたのか」

「うん、ブラッド達にね」

わたしのその答えが気に入らなかつたらしく、カディイスは眉を顰めた。

「……あまり他の男と仲良くするな」

「……なんで？」

「俺が嫉妬で狂いそうになるからだ」

「嫉妬つて……、カディイス大袈裟だよ。ブラッド達は友達だもん。そんなこと心配する必要ないつてば」

「おい……、友達とはどうこうことだ」

「今日友達になつたの。ブラッドとヒューとマー・ティン」

わたしがそう言つと、カディイスは目をむいて叫んだ。

「だ、駄目だ、駄目だ！ 男だけは駄目だ！」

「ええーっ、カディイス酷いよ。ただの友達だよ？」

「どちらが酷いんだ。おまえが友達と思つても、向こうがそつだとは限らないだろ？」

「そんなことありえないよ。カディイス、考えすぎ。そんなに心の狭

「い」と言つなんなら、嫌いになるからね？」

ちよつと首を傾げてにっこり笑うと、カディスは頭を抱えた。

「……俺は今、おまえが悪魔に見えたぞ」

「失礼な。それなら、とことん演技してやるからね。

「友達くらい自分で選びたいじゃない。王族だからみんな遠慮するし、そういうのって結構寂しいもの」

沈んだように下を向いて言うと、カディスはつゝと詰まつた。どうやら、カディスにも覚えがあるらしい。

「……ねえ、どうしても駄目?」

目を潤ませて上目遣いに見ると、カディスが明らかにうろたえた。「わ、分かつた、認める。認めるから、そんな目で見るなー。」

「よっしゃあ！」

わたしは心の中でガツッポーズを作った。

「カディス、ありがと。とても嬉しい」

「……ああ」

にこやかに笑うわたしと、燃え尽きたようなカディス。

わたしが勝利に酔つていると、執務室のドアがノックされた。カ

ディスが入室を許可すると、入ってきたのはイザトさんだった。

「随分と賑やかですね。イルーシャ様、いらっしゃいませ」

「イザトさん、お邪魔します。あと少し要件を話したら、カディスにきつちり仕事してもらいますから」

そう言つたら、イザトさんがくすつと笑つた。鉄面皮だとばかり思つてたけど、珍しいものを見たなあ。

「さつきの話の続きなんだけど、わたしの絵姿を桜の代金に充てる件、考えてくれないかな？」

「……分かった、そうしよう。Hーメの樹の件についてはそれほどおまえが気に病むことはないぞ。おまえの絵姿が飛ぶように売れていて、需要が供給に追いついていないらしいからな」

「うん、騎士さん達もわたしの絵姿持つてゐる人いるみたいだつたね」

そう言つと、なぜかカディスは顔をしかめた。

「……どうしたの？」

「いや、おまえの絵姿を他の男が持っているところのは嫌なものだな」

「変なの、ただの絵じゃない。それをいうなら、不特定多数に絵姿を持たれてるわたしの方が恥ずかしいよ」

わたしは笑って言つたけど、カディスはまだ納得してないようで不満そうだ。

「……ひょっとして、カディスもわたしの絵持つてるの？」

「ああ、俺も何枚か持つてるぞ」

「そんなに持つてどうするの。一枚でいいじゃない」

「というか、一枚でも充分恥ずかしい。」

「俺の部屋にいくつか飾つてある。それとしん……いや、なんでもない」

「……？」

カディスがなにか言いかけてやめたのを不思議に思いながらも、わたしは椅子から立ち上がった。そろそろカディスに仕事して貰わないといざとさんが煩しがる。

「じゃあ、わたしそうそろ帰るね。仕事頑張つて」

イザトさんにも挨拶して、わたしは部屋を出る。

「……陛下、嘆かわしいです」

直前にそんなイザトさんの溜息混じりの言葉が聞こえてきたけれど、カディスのなにが嘆かわしかつたんだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0632ba/>

月読の塔の姫君

2012年1月10日22時49分発行